

Japan  
 2/14/13  
 162  
 saishotojomaekooiuna  
 00304717750  
 5301450  
 Saishō to jōmaekō /  
 Runacharusukī. Danton  
 no shi / A. Torusutoi ;  
 Sugimoto Ryōkichi  
 vaku  
 L8 K315 1







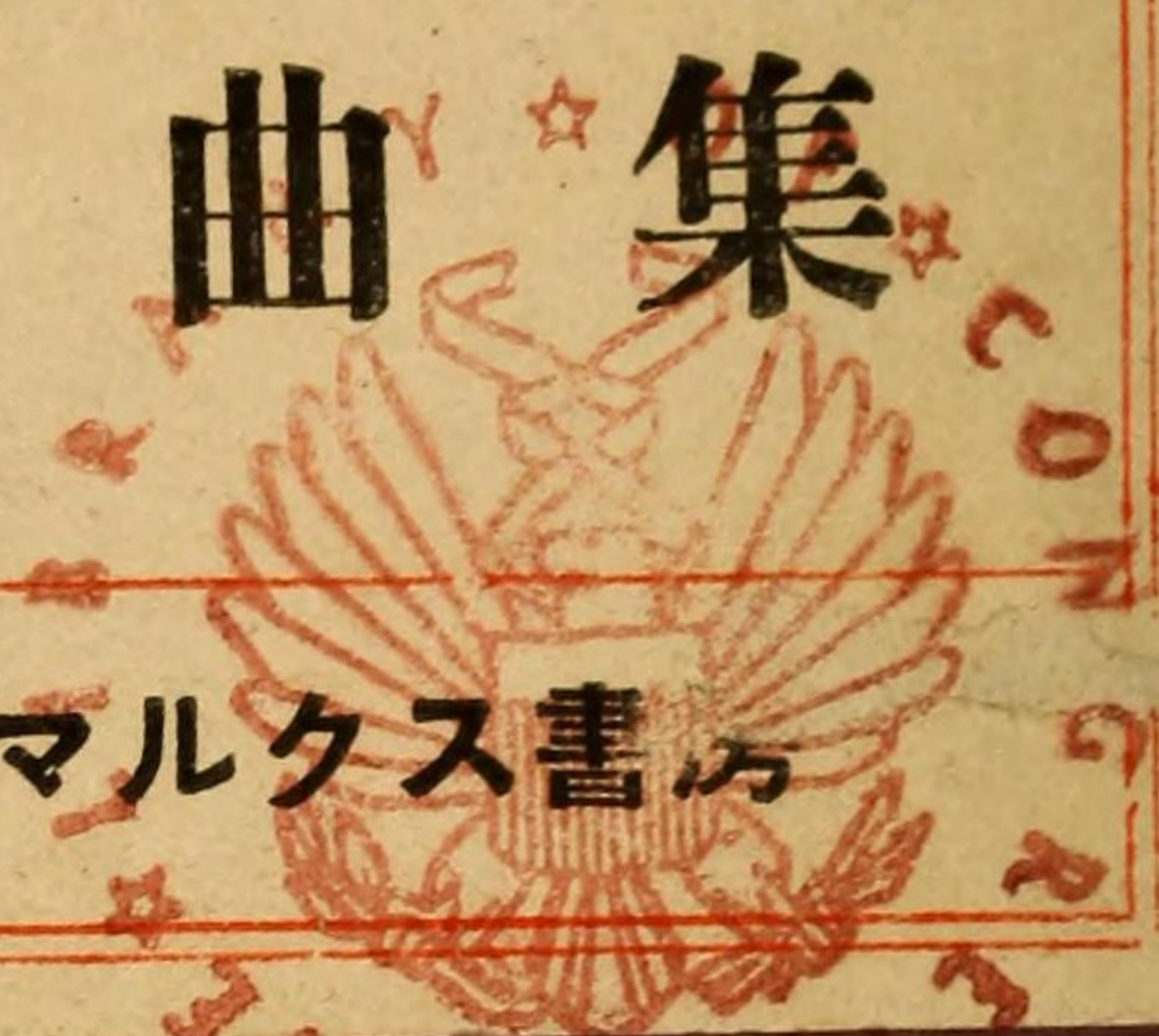
ルナチヤルスキイ 作 杉本良吉 譯  
ア・トルストイ

勞農ロシヤ文學叢書第三輯

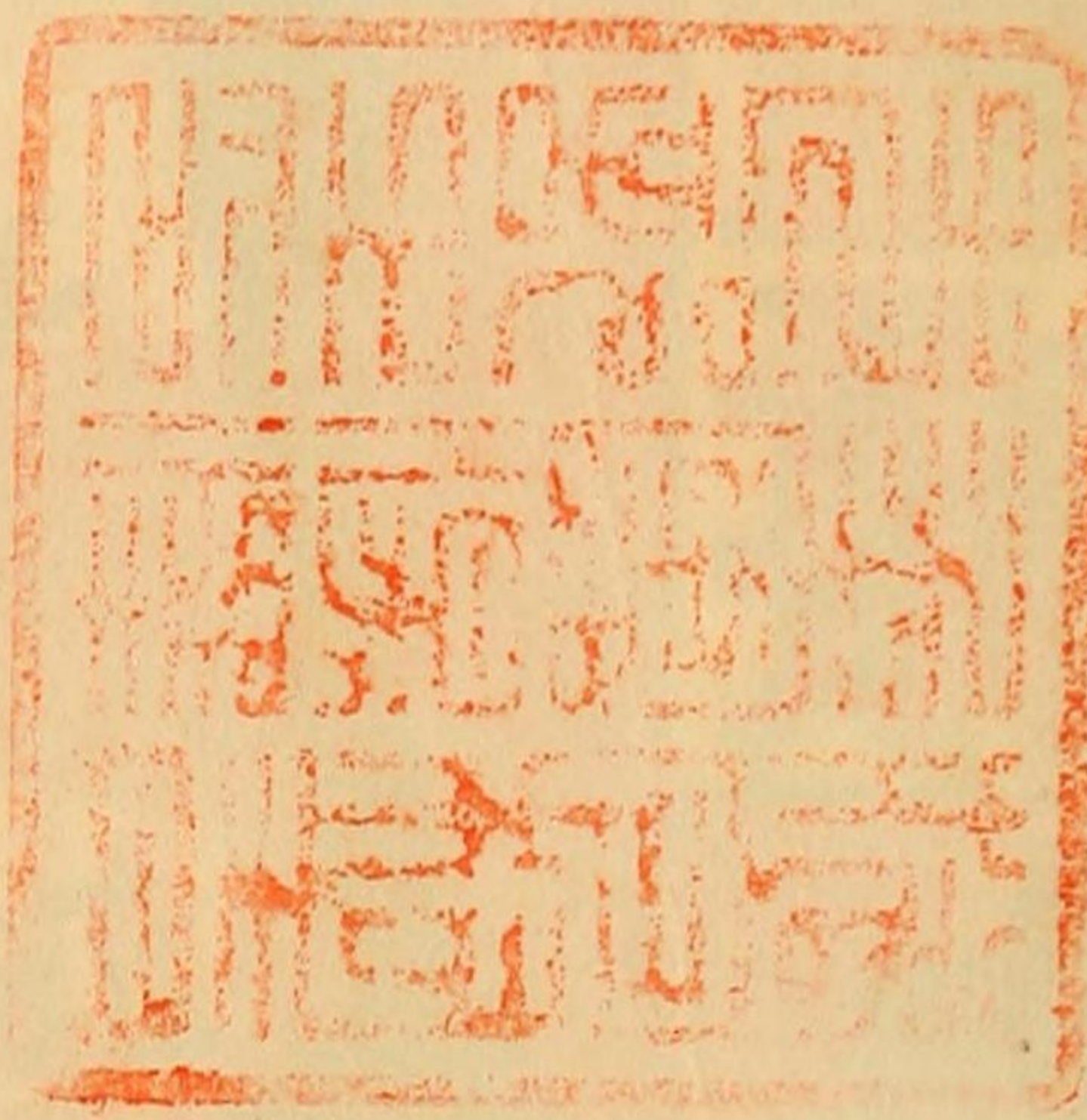
勞農  
ロシヤ 戲曲集  
330588

1929

マルクス書房







70  
12  
十  
挽  
三  
付

抄  
卷  
一  
藏

卷  
一

Lunacharsky, Anatoly Vasilievich

ヤエロノ豊勞

戯曲集

ルナチャルスキイ

宰相と錠前工

ア・トルストイ  
1904  
タラシツの死

不詳來真吾訳

megaro

メロ書房  
版



96-840720

勞農ロシヤ戯曲集

PG 3476

L8 1315

1929

Onna  
Japan  
Cuz

後  
豊  
口  
シ  
ヤ  
鑑  
曲  
集

36-040229

目次

宰相と錠前工……ルナチヤルスキイ……………(一)

ダントンの死……ア・トルストイ……………(一〇五)

クニトンの紙………(104)

染紙の織物工………(11)

目次

宰相と錠前工  
(十場)

ルナチヤルスキイ



## 主要なる登場人物

ノルドランド大公

カール・デルンバッハ・フォン・トゥラウ伯爵

ノルドランドの宰相

ガンメル 生産業者

レオ 宰相の長男、輕薄な士官

ロベルト レオの弟、詩人

フランク・フレイ 辯護士、社會民主々義者

ペートリッツ 宰相の秘書

マックス・シユタルク 年老いた労働者

エンマ・シユタルク その妻

ユーリス その息子

フリッツ ユーリスの兄、革命的労働者

アンナ 女子労働者、フリッツの戀人



クレールヘン アンナの妹

ケツペン その夫

宰相夫人

ラ、 宰相令嬢

レオポルド・フォン・ガトルプ 年若い伯爵

ミツチー・ガトブル その夫人

ラデファイ 音楽家

ベレンベルグ 將軍

ゼツペル 労働者

ビーボル 年老いた労働者

その他、労働者、警官、士官、兵卒、紳士、給士、等大勢

場 割

第一場 宰相の書齋

第二場 労働者街の貧家の一室

第三場 宰相邸の客間

第四場 戦地、騎兵師團長レオの天幕

第五場 宰相の書齋

第六場 ケツペンの邸宅

第七場 宰相の書齋

第八場 フランク・フレイの部屋

第九場 グラウベルゲンの舊知事邸の大廣間

第十場 南國の温泉地

## 第一場

宰相、カール・デルンバツハ・フォン・トゥラウ伯爵の書齋。非常にきちんとした部屋、事務用の造作、机の上には大公の肖像が置いてある。幕開いて暫くの間、舞臺空虚、やがて従者が入つて来て、安樂椅子を机から少し離し、机の上の色々なものを取片付けて後、直立の姿勢を取る。宰相落付き乍ら、しかも物思はしげに入つて来る。彼は黒の長いフロツクコートを着て居る。

机の上にシルクハットを置き、静かに手袋を除いて、その中に入れる。ほんの一寸従者に合圖をする。従者恭々しく帽子をとつて退場。宰相、安樂椅子に腰を下す。暫くの間、眼前を見つめて疑つと坐つて居る。やがてゆつくりと何か紙片を手に取り、読み、署名する。従者、出て来て屏の處で止る。宰相は彼に視線を向ける。

従者 七等官、クルト・ガムメル伯爵がおいでになりました。

(宰相がうなづくと従者退場。宰相は書類を調べて居る。ガンメル現れる。鼻眼鏡をかけた、ぶく／＼肥りの、非常に禿げた男。丁寧に會釋し、微笑む。宰相は冷淡に尊大にして居る。手で席をすゝめる。)

ガンメル (腰を下し乍ら) 戦争が始まりました。以來一月と云ふもの、經濟生活に於て、悲觀主義者共が豫測した以上の多大な損失を蒙つたと云ふ事は勿論、伯爵も御存じの事と存じますが……

(宰相、靜かに頭を廻して、彼を眺める)

ガンメル この上戦争が長引けば財政は滅茶苦茶になつてしまひます。こんな戦争はびた一文にも成りは致しません。

宰相 (心持ち微笑み乍ら) だがシヤンパンの栓は抜かれてしまつたからの。

ガムメル すれば飲まざるを得ません。平和はもうどんな事をしても取戻す事は出来ません……

宰相 君が手から離して仕舞つた平和はですな。

ガムメル　何も我々に罪をおきせになることはございませぬ。我々の隣國が良を仕掛けたのだと云ふ事を知らないものは誰一人居りませぬ。だが、果してノルランドは充分考へたのち、事に當つたで御座いませうか？

宰相　その通りだといふ事は君もよく知つての筈だらう。我々は如何なる場合に於ても、良き争ひよりも寧ろ悪しき平和を選ぶものですからな。

ガムメル　伯爵、若し我々が熟慮を爲なかつたとしたならば、それは貴君の非常な權力に兆されたからす。

宰相　俺は貿易業や生産業のお歴々の氣持ちが武官達同様勇敢であると云ふ事に氣付かなかつたなら、ヨーロッパとの衝突に關しては決して何事も云ひ出さなかつただらう。

ガムメル　つまり、敵の奸策を總て計算に入れておられる大公の御意志も同様で御座いました。

宰相　ほう、では一體どうしたら良いと云はれるんぢやかね？

ガムメル　生産業者中の主要な人々が正式に、いや、たとへ秘密にでも此の私を、信ず可き人物として、國政に直接參與する事をですな、そのオ、望んでくれたらと、から思ふのですが、……

宰相　國家の顧問にかな？將軍の參謀にかな？大公への報告役にかな？

ガムメル　いや、いや。貴君の兩肩に掛つてゐる責任の重荷を軽くする爲に協議をする人々の中に交せて戴き度いのです、伯爵。

宰相　俺にはそんな人々は無い。

ガムメル　併し、貴君はお一人では有りますまい……………

宰相　内閣……………大臣會議……………大公……………議會……………

ガムメル　お待ち下さい、伯爵閣下。勿論、さうしたものはみんな戦争の眞最中でさへ保ち得る装飾品に過ぎません。其處を通過する決定事項は他の場所で決められるのです。

宰相　勿論、俺が國家の建設の爲めに提案する決定事項は前以て再三、再四熟考された上のものぢや。

ガムメル　何處で？

宰相　俺の頭蓋骨の中です。

ガムメル　（微笑み乍ら）その尊敬すべき頭蓋骨と装飾品との間にもう一つ内密の機關を差入れる事は出来ないでせうか？

宰相　俺には政治上の秘書官は無い……………俺には政治上の戀人は無い……………俺には友達は無……………

ガムメル　　國政に經驗を持つて居る非常に重要な人々のグループをですな……

宰相　　君とベレンベルグ將軍か？そんなものは俺には要らんね。

ガムメル　　併し國家に取つては？

宰相　　問題は俺の考へに付いてだ。俺は自分の考をちやんと公に發表する、が前以て個人としてそれを組立てゝ置く。

ガムメル　　では貴君は戦争といふものが××の力に依て左右されるといふ事を否定なさるわけないので御座いますな？

宰相　　三時十五分過ぎか……四時半迄に仕事の準備をして、――殿下に報告せねばならん。

ガムメル　　閣下は閣下の權威を過重評價してをられますぞ。

（宰相、黙つて居る）

ガムメル　　資本は自分が無視されるのを黙可する事は出来ません。

宰相　　君も知つての通り、我々は君達の政策を行つてゐるものだ。天の意志に據て……。何故と

云ふに我々、國政に參與して居るものにとつては、よかれあしかれかう思はれるのぢあ。即ち

現在國家の利益は××家の利益と一致して居る、と。我々が君達の代理人であると云ふ事は御

存知の通りだ。俺は神、大公、民衆以外の何者にも服従し度くは無いが、それ等のものが俺の良心に命令して、資本の最大限度の増進を爲し得る政策を取らすのだ。此の上、貴君は何を望むんぢやね？

ガムメル　我々は我々自身で我々の仕事を致し度いのです。

宰相　失禮ぢあが……國家は我が國の貿易と生産の利益のために幾多市民の血と骨とを危険に曝して居るのです。これに對して答へ得るものは唯、私慾を持たない人間、故國全體の利益より尊いものは全世界に有り得ないと云ふ事を、神と良心の前で云ひ得る人間のみなのぢや。

ガムメル　併し、我々は……

宰相　貴君方は生産業者だ。そして貴君方は必要だ。若し國政に參與するものが國內の工場や商船を管理したならば、我がノルドランドの國家は衰微して仕舞ふだらう。が、商人や工場主が國家を管理する様な事があつたらそれこそ悲しむ可き事だ。

サムメル　そんな事は皆、神祕主義です……

宰相　國家。丁度聾に音樂が判らない様に、君には國家といふものが判つて居ない、そしてこれからとても判らないだらう。(立上り、冷く會釋する)いや、失禮しました……

ガムメル　貴君は挑戦なさるのですか？

宰相　どう致しまして。生産業者は新聞、連絡、市民の権利を持つて居ますからね。出来るだけの事をして固執なさるがよい。貴君が俺の理性と良心の一部分にならうと望んで居られるとしたらそんな望みは蒙想に過ぎん。そんな事は君の様な現実主義者には向かんよ。俺と論争するのは止めて呉れ給へ。我々は深淵の眞際に居るのだ。静かに坐つてお出でなさい、——さもな  
いと利益どころか、深淵に呑込まれて仕舞ひますぞ。

ガムメル　恭々しく敬意を表します、伯爵閣下！

(宰相、尊大に會釋する。ガムメル退場。宰相立上つて窓際に近づく。一寸の間、其處で、眞直ぐ、動か  
ずに立つて居る。從者現れる。)

從者　閣下、御邪魔を致して相済みませんが、若様のお見えて御座います……

宰相　(素速く、向き返へる)　レオか？通せ。

(從者扉を開く。　燦びやかな騎兵將校レオ・フォン・トゥラウ足早やに入り来る。彼の顔及び動作に  
は純軍隊教練から得た調和を越した或るハトモニーがある。彼は非常な美男子である。)

レオ　今日は、お父さん！

宰相　今日は、今頃どうしたと云ふんだね、一體？



レオ 貴君の過失を防ぎたかつたからです。

宰相 (眉を顰めて) おや、お前はもう俺より恠功になつたとしても云ふのかい？

レオ そんな事は百年経つても私には出来ません。併し、私の謙遜な智識はもうお父さんのロマンチックな心よりも賢くなつて居ますよ。

宰相 一體何の事だい、そりや？

レオ ペトリツツから聞きましたが、お父さんはロベルトが軍隊に採用される事を一途に望んで居られるんださうですな？

宰相 さうだ、俺自身もだ。誰の子でも戦争に行くのだ。先づ、俺の家から初めなけりやならん。

レオ 併し、ロベルトは自由にしてやらなければいけません。私は何もそれ以上の権利を云々するのでは無いのです。か弱い詩人を血なまぐさい仕事に追ひやるのは残酷です。それにあれは軍務に服す程強健ではありません。軍隊に入る事は不可能です。兎に角、何處かの本部で勉強するでせうから。

宰相 あいつは歩兵士官學校に入學する、それから入隊して旗手になるんだ。

レオ ロマンチストが兇猛に成り始めた……ブルータスの眞似をなさないで下さい、お父さ

ん……

宰相 俺はそんな真似は決してしないよ、レオ。

レオ それぢあ、貴君自身が本物のブルータスなんです。貴君は自分の誠實さの證據としてロベルトの血を欲して居るんですか？

宰相 (興奮し乍ら) 神様が俺の下からこの様な辛い杯を運び去つて下さる事を俺は望む、併し國家の行爲の本原を疑ふ事に依てのみ、彼の血が救はれるのならば、——俺はそれを救ふ事は出来ない。

レオ それはピュリタンの傲慢といふものです。

宰相 宰相はピュリタンでなければならぬ。戦争なんだぞ、レオ。神様はこの様な時に眞實の宰相を人民に贈り給ふのだ。それともお前は俺が神の過ちに依ておくられたものである事を望んで居るのか？戦争なんだぞ、レオ。お前は輕はずみな武士氣質を持つてゐる。お前は戦ひに酔つた男の様に、戦争を、一つの技術か何かの如くに思つてゐる。幸福で居るがいい。が、俺は限り無い醜惡の中に戦争を見る。若しそれを價值あるものとしなければ、あらゆる愚劣、あらゆる獸の様な罪惡にも劣つたものだ。

レオ 僕は屹度貴君を失脚させて見せます。

宰相 なに？何だと？

レオ 僕は屹度貴君を失脚させて見せます、お父さん。それとも貴君は自分の名聲の高潔さを保たんが爲めには、一人の息子の墓では充分で無いと仰言るのですか？

宰相 レオ！ レオ！ お前は俺の可愛い、勇敢な、名譽ある武士だ！お前は俺の愛、俺の歡喜

だ！お前の様なものゝ爲めにこそ、美人が住み、音樂が響き、大地は酒を造り出して居るのだ……或ひは、他人の悩みを贖つて喜びを感じ得るお前の様なものゝ爲めに、全世界が存在して居るのかも知れない……レオ……

レオ さうです、お父さん、貴君のものであり、又同時に僕のものである神は貴君にかう云ひました。「アブラハムよ！イサークを取れ！」と。…… がお父さん、アブラハムには一人の

イサークしか居なかつたが貴君には二人のイサークが居ます、貴君は二人とも愛して居る。一人だけ犠牲になれば足りるのです。それなのに、どうして神の召喚も無いのに唯何かの氣まぐれや、一から十迄カント風な物の秩序の爲めに、他の一人をも焚火の中に投げ込まなければならぬのです。私は戰鬪の焚火の中に進軍させよう。私は常にかう考へて居ました、戰爭即ち

勝利。が、今では屢々かう思ひます。戦争——即ち死、即ち勝利。私は唯、心から生きたい。が若し心から生活するのを弱め無いものは死のみであつたならば、私は死にませう。私には生きる事が出来、亦死ぬ事が出来ます。が、ロベルトは夢見る事が出来るだけです。私には大勢の女が居る。彼女達は英雄の墓石の上に悲しげに涙するでせう。そしてその中にはお母様も交つて！ ロベルトには唯、ララとお母様が居るだけです。彼の死は、この二人の死も同様です！何事にも尺度と云ふものがあります、お父さん。貴君のなさらうとしてゐることは間違つてゐます。

宰相

堪らない話だ、レオ。それにお前は話の筋道を悪い方に變へて仕舞つた。俺は殿下の所に

參上せねばならん。

レオ

意志。全くです、お父さん。恐らく貴君は自己を崇拜する事に依て、自他共に不幸の淵に

墮入れるでせう。宰相の位についたブランドです。僕も前からこの事は判つて居ました。「此處に我あり、しかして斯くあるのみ」。獨逸式な信仰だ。これ等は總て戦争の炎に依て強められたんだ。あゝ、僕にはよく貴君が判ります、だがそれを許す事は出来ません。僕の考へでは、これは總て或る田舎ぢみた、もつと手取り早く云へば、全く、町人根性的な偉大さなのです。

宰相

俺は——大公殿下に伯爵を賜つた。が俺の心と身體は平民だ。お前のお母様はハンガリー

の貴族の出だ。恐らく、お前と俺とは血が違つて居るのだらう。

レオ　そんな事は皆メロドラマです。戦ひませう。晴やかに、卒直に、殺し、そして死にませう。そして、さうあつてこそ美しいのです。坊主や、カントやファイヒテなんか鬼に食はれて仕舞へ！

宰相　お前は興奮して居る。

レオ　僕は今日、大進軍の準備をして居る西部におもむきます。

宰相　俺の祝福を受け、お前の父に對する満腔の尊敬の念を胸に抱いて行くがい。

レオ　僕を惱まさないで下さい。僕の良心は貴君に反對して叫んでゐます。お母様もラ、もロベルトもお殺しなさるがい、唯あのタルチュフのみが………否、否、タルチュフでさへ決して自分の偽善を隠す様なものではありませんでした。堅い石の様な心を持つた聖人よりも偽善者や虚飾家の方がずつとましです。

宰相　俺はそんな口の利方を許さん。

レオ　あゝ堪らない。お父さん、お父さん！

宰相　君の前に坐つて居るのはノルドランドの宰相だ。上官だぞ。

レオ　さうですか………では止めませう、何も云はなかつた事にして。手に接吻させて下さい、

お父さん。

(宰相、足早に彼に近寄り、彼の頭を、同時にレオは父の手を接吻する。二人の眼には涙が浮んで居る)

(白髪 of 役人、あたふたと入り来る)

役人 大公殿下がお見えになりました。

宰相 何だと！ 殿下が俺の所へ、此處へ？

(扉、廣く開け放たれる。年若く、丈の高い、薄色髪 of 頭髪をした、表情に乏しい顔付きの大公登場。傍に太つた、立派な副官がサーベルと拍車をガチャ／＼云はせてついて来る。宰相、恭々しく禮をする。士官達は互に敬禮する。)

宰相 とんだ光榮に浴しまして……

大公 とんだ不幸にだよ、伯爵。まあ、坐らう。

レオ 殿下、私は失禮さして戴いて差支へ御座いませんでせうか？ 本日、西部に出發する事になつて居りますので。

大公 勝利を得て歸つて來て呉れ給へ、トウラウ。行つて來給へ。

(レオ、拍車を鳴らし、出て行く。)

宰相 私の推察致しまする處では、何か異様な、未だ私の存じませぬ事柄が起つたのではないか

と思はれますが。

大公　ベレンベルグが俺の所に異様な報告を齎したのだ。風向きはよろしくない。ベレンベルグは、我國には本當の政府は存在して居ないと云ふのだ。

宰相　（微笑み乍ら）、殿下……

大公　俺は自分や宰相に關してではなく、實際に、直接に國家を統治して居る中央部について話して居るのだ。參謀本部は勝手氣儘だ、大藏省は孤立してゐる、行政にしる對外政策にしるみんな散々ばら／＼の有様だ。そして是等總てが唯君の手で一緒にされて居るに過ぎない。併し現在の様な場合に於ては、總ては直接に、一つの中央部に依て指導されなければならぬ。

宰相　私を今の位置から退かせる事が、殿下に取つて御都合がおよろしいのでは御座いませんでせうか？

大公　止し給へ。俺は君を良く理解してゐる……總てを、我々——俺と君——とで統一しよう、だが、それだけでは充分で無い。我々は國家を統治して居る各方面の有力者を集めて中央委員會を設ける必要がある。ベレンベルグには立派なプランがある。秘密戰時政策委員會だ。委員長には俺がなる、委員は君と、ベレンベルグとあの産業界の大立物、七等官ガムメルとだ。君は

どう思ふかね？

宰相 餘計な差出口をしてはと恐れて居ります……

大公 俺は君を、君の政治的手腕を、君の國家に對する忠節を信じて居る、併し今は非常に危険な秋だ。あらゆる方面から勞力を集中しなければならぬ。今擧げた四人がノルドランドに號令しなければならぬ。

宰相 有りの儘を御話しする事を御許し下さい。

大公 (副官に)男爵、一寸の間、遠慮して呉れ給へ。(副官拍車を鳴らし、出て行く。)さあ、聽かう。

宰相 エベルガルト・フォン・ベレンベルグ將軍は、我が國に老リュトツフが居る限り、如何に名譽心が強くとも全軍を指揮する機會をつかみ得ないと云ふ事を知つて居るので御座います。いや、全く危険千萬な事で御座います。本部の主腦、フォン・シユウエーデをも亦退ける事は出来ません。軍事大臣のヴァイルビュースは自分の椅子にどつかと腰を下して居ります。それ故、名譽心の強い彼奴は自分の勢力を張る適當な地位を求めて居るので御座います。併し、彼奴は一體委員會でどんな仕事をするので御座いませう？一週間の中に立派な陰謀のプランを一ダースも造る事でせうか？會議毎に、巴里のファイガロの爲めに口先ばかりの花火を擧げる事でせう。左様、



ファイガロ……… 實際、エベルガルト・フォン・ベレンベルグは肩章をつけたノルドランドのファイガロで御座います。あんなやくざ物にお迷ひなさらぬ様になさいませ、殿下、あんな退屈な言葉にお惑ひならない様に。何時ぞや、誰かがあいつに爆裂弾と云ふ綽名を献上しましたが、ベレンベルグは爆裂弾どころか花火將軍で御座います。戰場では、役に立つ人々がおしきせ同様に斃れて居ります。それからガムメルですが、成程商人としては申分無い人間かも知れませんが、併し國家を運用する神聖な位置に彼を据へると云ふ事は、私にとつては神に對する侮辱としか思はれません。

大公　君は自分の宰相の位置を保つ爲めに非常に猜忌深くなつて居る様だ。俺は此處に来る時、決して君の諫言には屈すまいと強く決心して來たのだ。所で二つだけ頭数が足りないのだが、

宰相　頭数は多ければ多い程、不都合が生じて來ます。殿下、私は殿下の御前、民衆の前、歴史の前、そして自分自身の前でお答へ致します。私は殿下の適當なる補佐役たる可き力を自身の中に感じて居ります。私を信賴して載き度う存じます。君主は民衆に答へるものでは御座いません。君主は運命に答へるものでは御座いません。何故ならばその御心は飽く迄も高く、歴史をさへ超越して居られるからで御座います。貴君は象徴であられます。貴君は金甌無缺であら

れるのです、殿下。若し私の政治が失敗に終つたならば、私の身も、魂も、良心も、名聲も滅び果てるでせう。併し、貴君は御位にあらねば良いのです。御位は、幸福な時にも、不幸な時にも、唯一つ燦然として輝いて居ります。總ての事を氣使つて居る此の歳老いた、喧し屋の私には如何なる輕卒な事をも許す事は出来ません。夜晝、心の中で神と共に語つて居らぬ時とは御座いけません。信頼なさつて下さいませ、殿下。私にはガムメルもベレンベルクも不必要で御座います。彼等は亦、殿下にも不必要で御座います。

大公 (聲高く) 男爵! (宰相に) 君の云ふ通りにしやう、だが、君の諫言がこんなに厳しく聞えた事は未だ且て無かつた事だよ。

副官 (入り来る) 怪からぬ客が宰相を訪れて居ります、殿下。客間を通り過ぎる時、王冠を戴か無い労働者の王様、かの有名なフランク・フレイを見掛けました。

大公 君の處にフランク・フレイが居る? 社會民主主義者の頭目が? ふむ。社會主義者諸君は悟つたわい。奴等もスラヴオニヤの鞭が恐いと見えて、ノルドランド魂を出して來たのだ。諸君は愛國主義者の様な顔をして居た、がフランク・フレイが宰相の家の玄関に坐つて居る。實際、こいつは皮肉だ、俺は奴を肖像で見知つて居るだけだ。待てまで、一つ皮肉な事をしやう

ぢあ無いか。奴を俺の前に通し給へ。こいつは素敵だ。先づ第一に奴はどんな様子をするだらう？第二に歐羅巴中でどんなに騒ぎ立てるだらう？こいつは公にしなければならぬ。俺は命令する、フランク・フレイを呼び給へ。

宰相 殿下、殿下はガムメルとベレンベルグの優れた才能を私に語られました。が殿下、若し私がノルドランドで出會はした唯一の政治的天才を擧げるならば、それこそ外でもない、あのプロレタリアートの指導者である辯護士フランク・フレイで御座います。

大公 奴の事をたとと廣告するがいゝさ。シガーに火をつけて呉れ給へ、男爵。待てまで、俺はこの椅子に坐り度い、その方が便利だらう、男爵、君は俺の傍の椅子に坐つて居給へ。そして勿論、嚴肅と沈黙を守る事。ぢあ、初めやう。

宰相(鈴を鳴らす。秘書登場) フランク・フレイ氏を通せ。

秘書(扉を開き乍ら) 辯護士、フランク・フレイ氏はノルドランド國大公殿下に掲見の榮を賜はられました。

(フランク・フレイ登場。三十五才余りの強健な男。ラツサレに一才似て居る。恭々しく大公に敬禮して後、宰相の下に歩を運んで彼と握手する。)

フランク・フレイ 誠に光榮の至りでございます。

宰相 フレイ君、殿下の御前で君の總ての考へを御説明申し上げるがよい。

フランク・フレイ どの位の間差支へないでございませうか？（宰相尋ねる様に大公の面を眺めるが大公は何の表情も無く、可成り傲慢にフレイに眼を注いでゐるが、併し彼は平氣で居る）殿下には寸時をも惜んで居られます。

フランク・フレイ 簡単にお話し仕りませう。最近二十年間に於ける社會現象の第一位を占めて居るものは何かと申しますと、勞働運動で御座います。ノルドランド社會民主勞働黨は五十萬の黨員と五百萬の選舉人とを有して居ります。我國では選舉權を與へられて居ない女子をも加算すれば吾黨の味方は全人口の四分の一、即ち一千萬を數ふるに至りませう。我が國に、否全世界にも此の様な組織は又と御座いません。ノルドランドの官吏の組織を世界第一のものとし、

我が軍隊をば獨自のものたらしめ、生産の爲めに勞働階級に號令した所の根本精神が何者よりも強く我が黨に反映して居るのでございます。これこそ自己の理想、自己の旗印、自己の指揮者に忠實な眞の軍隊でございます。この軍隊の理想は國際社會主義であり、その旗印は階級闘争であり、そして殿下の忠良なる僕、フランク・フレイこそ、自他共に許したその指揮者で御

座います。飢え狂つた我が隣國は、我々をして恐る可き戦端を開かしました。この戦争の開始はノルドランドの社會民主主義と切り離す事の出来ない運命の下にございます。社會民主主義は政府に對して敵意を持つて居り、數週間後には政府を轉覆するのでございませう。が若し反對に労働者の指揮者たる私が此の巨大な組織されたエネルギーの流れを殿下の旗印の下に參ぜしめたならば、如何なる力もこの一つになつたノルドランドに對抗する事は出来ない事と存じます。

宰相　君は明智と愛國心とが命じた處の事を爲し遂げたのだ。この困難な時に際し、我々に取つては空想であり、君に取つては理想である所の考へを退け、君に課せられた義務を盡しつゝあるのだ。

フランク・フレイ　この事業は決して容易で無かつたと云ふ事をお察し下さい。左様、ノルドランドの労働者の間には未だ端的な愛國心が残つてをりました。又、他のものは勝利と敗北とは労働者に如何なる結果を齎らすかを考へました。が、多くの者の議論はかうでした。戦争をやつて居るのは×××共だ。被壓迫大衆は一致團結して彼等を投はり出して仕舞はねばならない。と。若し指揮者の位置にあるものが十年の間實際的建設の準備をしたならば、革命的國際主義

は科學的社會主義の根本の理論から流れ出て、黨のあらゆる集會、印刷物に依て堅固にされ、最後には、無限の實行力を有して居る憤怒に燃えた大衆の支持を得るに至るてありません。

大公　君は猶太人かね、フレイ君？

フランク・フレイ　私は無信仰でございます、國籍から云へばノルドランド人でございますが両親は猶太教を信奉して居りました。

大公　俺は君が自分の功名の値打ちを説いて居るのだと云ふ事に氣が付いた。で多分その報酬が要るのだらうと思ふが……

フランク・フレイ　モーゼも、豫言者マイモニードも、スピノザも、マルクスも、ラツサレも自分の仕事の報酬に對しては興味を持ちませんでした。キリストの様な事をやつたからと云つてその事が己れに貪慾の疑ひを招く筋合のもので御座いませうか？

大公　俺は今あの事を尋ねた時に、キリストの事など思つては居なかつた——それよりもユダの事をと云ひ度い位だ。

フランク・フレイ　殿下は、私をば革命の裏切者と呼んで居る共產主義者のエドワード・ビツモルと全く同じ様な事を仰せられます。否、私は革命を裏切つたものではございません、彼等を

捨て、殿下の元に來たのでもございませぬ。そんな事をしやうと一足も踏み出さうとした事さへ有りませぬ。フランク・フレイは依然として革命家であり、社會主義者でございませぬ。唯、は私賢明な道を探して居るのでございませぬ。社會主義は經濟的にも準備されなければなりません。その爲めには唯資本主義のみが地盤となる事が出来、その上でこの人類の崇高な草花が成長するのでございませぬ。ノルドランドの敗北は資本主義の敗北であり、又一方、開花せる労働運動の敗北でございませぬ。即ち、社會主義の敗北でございませぬ。私はこの十字路にあつて殿下と協力して敵を粉碎しやうと欲するのでございませぬ。我々はそれから後で別れればよいではございませぬか。のみならず、我々が歐羅巴を撃退すれば、歐羅巴のプロレタリアートはその政府に反對して蜂起し、歐羅巴は政治的に一段と進歩の跡を残すでございませぬ。私の思惑は時計の様に正確です。私の思想は時代を支配して居ります。總ては私の見通し通りになるでございませぬ。報酬のお話などは誠に苦笑を禁じ得ませぬ。殿下は歐羅巴で一番強い人間にどんな報酬を與へる事が出来になりませぬか？ 私は歐羅巴の未來を何人よりも明確に豫知する事が出来、數百萬の撰りに撰つた人間が、私の素生、身分等に係りなく、この天才の力に心服しております。殿下は決して私のこの卒直さを、高慢だと御怒りになる様な事はないでございませぬ。殿下は哀れな猶太人、この辯護士を侮

辱なさらうと遊ばした、が私は殿下の前に居るこの男が何者であるかを御教へしたのでございます。

大公　とに角、俺の前に居る人間は、恐ろしく自信の強い男だ。それはそうと伯爵もドクトルもどうして立つて居るのかね？掛け給へ。

(兩人、禮をして、腰かける)

宰相　話の續きを何卒ぞ、フレイ君……………

フランク・フレイ　先程申上げた通り、労働者の間には不穩な微候が現はれ、それは益々昂まる一方で御座います。これは痲痺させて仕舞はねばなりません。逮捕したりすれば、火に油をそそぐやうなものでございます。苦しい時ではございますが、労働者に何かしてやる必要がございません。……………

宰相　私も同意見です。が、國家は御覽の通り固窮に墮つてゐる。

フランク・フレイ　それは切れ切つた事です。併し、労働者の功勞が認められ、プロレタリアートが實際に國家の一要素として出現する可き新時代の訪れて居る事を示さなければなりません。

宰相　で、どうしてそれを實行しやうと云ふ意見ですか。



フランク・フレイ　私を労働大臣に任命なさつて下さい。(間)私が決して名譽にも權力にも捉はれて居ないと云ふ事が判つて居て下さるだらうと私は信じて居ります。反對に私は非常な危険を冒して居ます。貴君は社會主義と云へば苦々しいピツセルのありとあらゆる暴論や、「社會主義の眞理」の毒矢を想出されるでせうが……併しこれは必要な事なのです。

宰相　俺はその事に付いて以前にも考へた事がある。色々な方面からこの問題を考へて見ると理にかなつて居る。

大公　併し、辯護士フランク・フレイは明かに我々の敵であり、戦捷の曙には再び我々と相闘ふであらうと云ふ事を公言したでは無いか。どうしてこんな大きな小羊を我々の困窮した政府の畑の中に入れる事が出来やう？

フランク・フレイ　戦捷の曙……が、殿下、先づ第一に勝利を得なければなりません。殿下は力を持つておいでになる。勝利を得さへすれば私を木屑同様にもみつぶし得るといふ事を御信じにならなければいけません。どうしてこんなわかりきつたことをお疑ひになることが出来るのでございませうか？

宰相　政府は神の外、何人たりとも恐れはしない。

フランク・フレイ　左様、さうあらねばなりません……………

大公　だが、君には君の目録見がある筈だ。

フランク・フレイ　我々の目的が一致して居る限り、勝利の爲めには私が必要で御座います。これは盲で無い限り、誰にでも明かな事でございます、それから後は……………

大公　それから後は、君が我々勝利者を投げ出すか、我々が君を打ち砕くかと云ふのか？それぢ

あ、どうもちつと妙ぢあ無いかね？勝利を得れば特權階級特に大公は未曾有の勢力を獲ち得ると云ふ事がフレイ君に判らん筈は無いか？君が敗けるのは火を見るより明かだ。

フランク・フレイ　その方が貴君の爲めにはよろしいでは御座いませんか、殿下。私の提案が採用してよいものである事がお判りになつたでございます！總べてのチャンスは殿下の側にあるのでございます。

大公　だが、俺は君の目録見が知り度いのだ。

フランク・フレイ　私は既に申上げました。ノルドランドの産業の偉大な開花。労働階級の強固な要求はこの開花期に於て自己の割前を持ちかくて労働者の要素が次第に優越になるに従つて政府との提携が強調され、職業組合が發達し、生産は除々にてはあるが信ず可き足取りを以て

我等の下に接近し、資本家と官吏は労働組合の幹部に轉化して参ります。その他多くの變化が起るで御座いませう、そして私もその事を信じて居ます、恐らくは殿下より以上に信じて居るで御座いませう。

大公　君は大變賢明だ、フレイ君。だが兎に角、我々に打勝つ事は出來ん。と云つて我々も亦君を粉碎する判けにはいかん。そこで君を買収する事にしやう。

フランク・フレイ　又で御座いますか？

大公　君は我々の魂となり、肉となるのだぞ。

フランク・フレイ　殿下は私をよく理解しておいでになりません。

大公　俺は未だ若い、が俺は大公だ。この事は何事かの經驗を與へて呉れる。その上俺は非常な賭博好きでその上スポーツマンだ。君の政治は君の賭博だ。俺は俺のバペンゲイメルを知つて居る。併し社會主義の主張が實際に君の魂ならば、君自分の魂を失くす事になるだらう。

フランク・フレイ　殿下の様な魁惑的な、賢明な若い方々が王位に在らせらることは喜ばしき限りで御座います。殿下は唯、充分な社會學的、經濟學的な準備を持つて居られないのです。若しさう云ふものを持つて居られたなら、殿下自身が仰せられた私の賭博なるものは避け難い

社會主義の勝利への、正しい戦術に依る信ず可き道程に過ぎ無い事が御判りになるでせう。

大公 何故黙つて居るのだ、宰相？

宰相 我々は労働階級に同情を寄せねばなりません。我々は亦我が反動の城を撃破しなければなりません。フレイ君の提案は採用すべきで御座います。

フランク・フレイ 喜びの至りでございます。

宰相 微細な點は明日熟考する事にしよう。

フランク・フレイ 私は此の上、一分も御邪魔は致しません。

(敬禮をして去る。)

大公 危険なことは無いかね？

宰相 決して。若し労働者が彼に従ふならば我々は苦しい病——革命の激動から解放されるで御座います。で無ければ、我々は労働者達を我が手に奪ひ、自分自身で賢明な人間を獲得しなければなりません。

大公 どつちがするいだらうな——我々かね、それともフレイかね？

宰相 神は我々總てを統べ給ふて居られます。

——幕——

## 第二場

労働者街の貧家の一室。右方に、カーテンが開け放されて、寢臺が見える。寢臺の上には年老いて病んで居るマックス・シュタルクが寝て居る。激しく咳をする。色衰せた油布に蔽はれた家具に取圍れた机に向つて、老婆エムマ・シュタルクがランプの燈りを便りに編物をして居る。十四歳になつた子供のユーリス・シュタルクは今し方學校から戻つて来て、ランドセルの中から本を出して居る、壁には社會主義の系統圖が額に入れられて居り、マルクス、エンゲルス及びラッザレーの肖像がかゝつて居る。マックス、非常に激しく咳をする。老婆、靜かに仕事の手を休め、立上つて彼の方に行き、枕を直す。靜かに俯向いて、彼の額に接物し、元の席に戻る。

マックス ユーリス！

ユーリス なあに？お父さん。

マックス 何か變つた事があるかい、世間ぢあ？

ユーリス 新聞に出てゐる外は何も新しい事はないや。

マックス 學生達はどうかだい？

ユーリス 僕達は今皆んな愛國主義者なんだ。祖國を守るんだ。僕達は若いんだからぐさぐさ考

へてなんか居られないさ。

マックス 先生達は？

ユーリス ノルドランドとその文化を守る爲めに稽古時間を皆變へて仕舞つたよ。

マックス(咳、む) 馬鹿な！労働者が變つて仕舞つた今となつては、そんな判らず屋や學者様に

何が期待出来るものか？ 呪はしい時代だ、呪はしい時代だ！婆さんや、俺をもう少し上の方

に坐らせて呉れんか。ユーリスに一寸、話がしたいんだ。

ユーリス 身體に悪いよ、お父つあん。

マックス その代り、お前には爲めになる事だ。

(老婆は近づいて、彼を寢臺の上に坐らせ、額に接吻する。)

エムマ(小さな聲で) 叱べらない方が良いよ。

マックス だが義務は果さなけりやならん。ユーリスはもう直き一人前の市民になるんだから

な。

エムマ ぢあ話すがいよ。だけど、お前さんのお説教はあの子には向かないよ。

マックス 此方へ来て、俺の傍にお坐り、ユーリスや。

ユーリス(近寄つて坐る) 何あに？……………

マックス 俺の話を知くと退屈するかい？

ユーリス 面白くないや。

マックス まあ、お聞き、俺の云ふ事を聞くんだよ、ユーリス。炬火の火はもう落ちて仕舞ふのだらうか？若々しい手は燈火を捉まへないのだらうか？（咳をする）俺が二十五の時だつた。主人が俺をロンドンに派遣して、レッズリー・アンド・コンパニー大工場を視察させたんだ。いいか。其處には、ノルドランド人の熟練技師で、ベツヘルといふ男が勤めて居た。奴は守銭奴だつたが、仕事にかけらやあ立派なやりてだつた。奴は俺の御主人のクロニツクさんとの打合せがあつたんで、生産の微細な點や、秘密やらを俺に説明する事になつてゐたんだ。工場はロンドンの街外れにあつた。で、丁度十八人のノルドランド人が集つた。皆んな若者だつた。お前聞いてゐるかい？

ユーリス あゝもう何度も聞いたことがあるよ。

マックス 聞いてるんだぞ、いいか、ユーリヘン、聞いてもいいことなんだ。此の事は、何遍聞いてもいいことなんだ。俺達は「Gambrius」と云ふ酒場で、魚を喰つたり黒麥酒を飲んだりして居た、と不意に、俺達の友達で組合の書記をやつて居るトーマス・ヴィガントと一緒に、

毛皮の外套を着た、丈の高い立派な男が入つて來た。もぢあぐした白い顎鬚、大きな口鬚。その人は帽子をぬいだ。——廣い、白い額で不思議な若々しい眼つきをした男だ。「ノルドランドの黨員諸君ですか？」とその男はきいた。俺の心臓は早鐘の様に鳴つたよ

(咳をする。)

(老婆、近寄つて色々撫で擦つて介抱し、額に接吻する。傍にたゞすむ。)

マックス　俺の心臓は早鐘の様に鳴つたんだ。「貴君は誰方ですか？」と尋ねた。——「私はフリードリッヒ・エンゲルスです」。俺は両手で、あの×××宣言を書き記した手を握りしめて、あれも話さう、これも話さうとしたが、それが出來ないんだ。涙が出るばかりだつた……　　勞働者は一齊に呼んだ。「俺達の老先生、エンゲルス萬歳！」つてな。(涙を拭ふ)あの人は俺達と一緒に三時間も坐つて居た。あの人は、丁寧に、上手に俺達を教へてくれた。俺達と一緒に、革命歌や民衆歌を唱つた。俺はかう聞いたんだ。「貴君はラインが戀しくはありませんか、タワリーシチ・エンゲルス？」答はこうだ。「プロレタリアが生活し、戦つて居る處は何處でも我々の故郷だ」。すると、木材工のガンネマンも亦尋ねた。「若し戦争が起つた時は、我々はどのようなでせうか？」あの人の眼はきらつと光つた。「我々は、搾取して居るブルジョアの蛆虫共に對



抗する唯一の労働者の軍隊となるだらう。」年老いた指導者はこう考へてゐたんだ。そして、此の事は目覺めた労働者にとつてのイロハになつたんだ。ユーリス、一體何が、お前や、可愛いフリッツの胸に下らん愛國心などを起させたんだ？あゝ、人間は馬鹿だな、あゝ、愚劣な、いやしむ可き奴隷の焼印、お前は何と奥深く、力強く喰ひ入つて居るんだ！

（扉が開く。闘の處にフリッツ・シユタルク現れる。快活な、素晴らしく元氣な青年。上衣の上から、首の周圍に赤い布を捲つて居る。烏折頭子を振廻す。）

フリッツ ユツヘー！ ゲンザ！ 皆んな喜んでくれ！ 萬事好都合。グレイスカヤ山を襲撃したスラボニア人は大敗北だ。それから、僕の方も甘く行つたよ。

エンマ（恐る／＼） 脱れたかい？

フリッツ 取られた。戦争に行くんだ。四ヶ月教練をうけて、ノルドランド大公の射手になるんださうだ！ だが××なんぞ糞喰へた。ノルドランド共和國萬歳！ ノルドランド社會主義共和國萬歳！ 歐羅巴社會主義合衆國と、その赤旗萬歳！ ユーリ、死ぬにも生きるにも男らしくやるんだ！ 資本でそれが防禦出来るものか。一旦起つた嵐は資本で征服されはしない。嵐の日はやつて來るのだ、お父さん。

マックス そしてお前は、へほ男爵様か何かの命令で、祖國の鰐共等の利益の爲めに、血をだら

だら流し乍ら、その日を迎へるんだ。

フリッツ 僕は労働者の兵士としてその日を迎へる。僕は××の中に正しい社會主義を吹込むんだ。

マックス そして敵のスラボニア人にも、ガリコニヤ人にもアルビオニヤ人にも手を差し出すのか？

フリッツ 我々が彼奴等を征服したらばね。

マックス 我々がだつて？

フリッツ 社會主義に依て肥つたノルドランドがですよ。

マックス (寢臺の上に眞直になり、その眼は閃いて居る) 呪はれる、辯護士のフランク・フレイ奴！

もつと、もつと呪はれる！

フリッツ (彼の方に飛んで行く) 昂奮しないで下さい。とてもひどい。顔色とききたら眞蒼で、紫が

かつて居るし、兩頬には汗が滲んで居ますよ。ひどい咳だ………氣を落付けて下さい、お父

さんは僕の尊い先生だ、僕に受つては二重の親だ……… (彼を横にする)。寢ていらつしや

い、氣を落付けて。信じて下さい。貴君のフリッツとユーリスは社會主義の名を穢す様な事は

ありやしない。我々に良心と自覺とに依て行動させて下さい。若し、誤りを犯したならば、僕は自分の誤謬を認めます。お母さん、窓のカーテンを閉めて下さい。それから幕を下ろして。寝た方がいゝですよ、お父さん。薬をお飲みなさい。何か弾いて、歌つてあけませうか？

マックス インターナショナルをかい？

フリッツ そりあ、歌ひ度いけれど、それよりもお父さんを静かにして上げなさい。「吾が父に贈れる子守歌」つて奴を歌ひますよ。いゝですか？

マックス（うなづき乍ら） そりや何時つくつたんだい？

フリッツ 何時だつたか忘れちまひましたよ。

（マックス、カーテンを閉め、寢臺の幕を絞る。フリッツは隅の椅子に腰を下す。ユーリスが彼にギタールを持つて来る。老婆は机の傍で編物をして居る。ユーリスは教科書に向ふ。フリッツ、静かに絃を合はせ、小聲で歌ふ。）

吾が父は働き疲れ、

鍛冶屋は疲れて兩手を置きぬ。

黄金の偶像かみは血を吸ひそゝる

何時の日か、休息、<sup>いこひ</sup>静寂、平和？

母なる大地の、白髪の子よ、眠れ……

人々を救ひし汝が手、汝が胸。

微笑みもて眠れ、甘く、甘く。

天國の子孫の爲めの、<sup>なれ</sup>汝は農夫よ……

ユーリス フリッツ！

フリッツ 何だい、ユーリス？

ユーリス お母さんが泣いて居るよ。

フリッツ（彼女の下に行き乍ら） 可愛相なお母さんが泣かなきあならない様な事ばかり起るなん

て。………本當に泣かないで下さい。お母さん、世の中あ、辛つ事だらけてすよ。何もかも變

へて仕舞はなくちあ駄目だ。そうしたら、もつと良いと時が来るんだ。私は未だピン／＼して

居る。何も悲しむ事は有りませんよ。お母さん、僕はね、どんな事があらうと晴々しくして居

やうと、心に堅く誓つたんです。何時迄かは判らないが、僕は永遠の爲めに働いて居るんで

す。不死の軍隊の死んで行く兵卒です。がその爲めにこそ、僕の兩肩は不滅の勝利の輝きを荷

つて居るのです。ハアツ、ハツ、ハツ。お母さんも笑ふんですよ！

ユーリス 僕も出来る事なら、嬉んで軍隊に行くんだがな。

フリッツ 推して見やうか？綺麗な軍服が着たいからだらう？

ユーリス 馬鹿……………

フリッツ あゝ、軍國主義つて奴は何て馬鹿々々しいんだ。それなのにおしやれをして、綺麗に着飾つて、人目を引きたがつて居るのだ。

ユーリス 今は皆んなが愛國主義者にならなけりやならない秋だよ。

フリッツ 俺の考へでは、誰も彼もが實際に於て最も先驅的な國家であるノルドランドの勝利を望まなりやならないんだ。それは全世界の幸福の爲めだからな。

ユーリス 兄さんと、一緒に戦地に行きたいなあ。だけどさう思ふばつかりだ。もう四年も早く生れたなら一人前の兵隊になれたのになあ！ だけど兄さんが可愛いさうだ……………いや、僕、

自分が悲しいや……………あゝ僕はもう判けが判らない。兄さんの事を考へたり……………新聞を讀んだり……………手紙を受取つたりするのはどんなに恐ろしいだらうね……………本當に恐ろしいだらうね。

(アンナ・クレイン・パリエル登場)

アンナ(扉を開けて) 入つてもいい？

フリッツとユーリス いゝともく。

アンナ(入り来り乍ら) 今日は、フラウ・エムマ、タワリーシチ・マツクス・シユタルクは眠て居る

の？小さな聲で話しをませうね。フリッツどう？行くの？

フリッツ 勿論、行くよ……もう泣かないかい？

アンナ 泣きあしないわ、何故つてもう随分泣いて仕舞つたんですもの、だけど亦泣く時が来る

かも知れない。(間)貴君に何やかや話し度い事があるの。

フリッツ 坐つてから聞かうぢあ無いか。(二人坐る)

アンナ 外でも無いけれど、とうく、クレールヘンの處に行つて來たわ。

フリッツ うん。そりや、ずつと以前に行かなけりやならなかつた事だよ。プロレタリアの女がブ

ルジョアの處に嫁に行くのは悪い事だ。だがあのケツペンには年も若いし、良い男だ。クレール

ヘンも身を賣つたんぢあなくて、惚れ込けだんだからね。

アンナ 聞いて頂戴よ。先づ第一に、あの人んとこの造りと來たら、とてつもなく立派なの。客

間も、晝も、風呂場も、絨壇も、棕櫚の木も、硝子細工もみんな、く、役に立たないものばかり。あんなものが私達に何になるでせう！

フリッツ　うん、………そして、ケツペンさんは？

アンナ　それで、とても馬鹿々々しい事が起つたのよ。妾達は何とか云ふ絹張りの椅子に腰かけてビスケットでお茶を飲んで居ると、急にバネ仕掛けの様な歩き方をする優男のケツペンさんが入つて来て、立止つたかと思ふと田舎の甘助か何かの様に眼をパチクリやつてるぢあないの。クレールヘンが笑つて、首に抱き付くと、妹を接吻し乍ら斯う云ふのさ。「俺は、お前より綺麗な女は世の中に居ないと思つて居たが、お前の姉さんは何とも云へない程魅惑的だね」妾がまごついて居る間に、奴、妾の手に接吻して仕舞ひやがつたの。するとクレールヘンが、「ぢあ、貴君は以前にアンナと知合ひにならなかつたのを残念がつてゐらつしやるのね？………さうしたら貴君は屹度アンナを選んだでせう？」つて云ふから、妾はかう怒鳴つてやつたわ。「妾はケツペンさんに選り好みをする権利なんかあげはしません！」。可愛相なクレールヘン！屹度、妹は怒つたに違ひ無いわ。妾は直ぐ其處を飛出しちまつたの。ケツペンはぐつたりと坐つて居ました。もう、二度と再びあんな處へ行くもんか。

(フリッツとユーリス笑ふ。)

フリッツ　可愛い相に、綺麗すぎるのも困つたもんだね。

アンナ　此れが妾の一番困る事なの。ねえ、フリッツ、妾は本當に眞面目に云へるの。女の労働者の綺麗なのは、とても不幸なものよ。自分をあらゆる男の汚辱の爲めの甘い一片だと思ひ、男の中に人間を見る事が出来ず、唯色慾と女たらしだけしか見られない……フリッツ、エンマ、妾には綺麗な髪の毛がありました、本當に膝迄届く金髪だつたわ。妾はその髪の毛が大好きだつたけれど、切つて仕舞つたの。妾は女の友達の前に出るのが恥しい事がある位、みすほらしい風彩をして居ます。仕舞ひには、兩方の眼の玉をくり抜くか、前齒を折る様になるでせうよ。

(フリッツとユーリス聲を立て、笑ふ。外部から歌聲が聞えて来る。)

歌聲　若き労働者の同盟よ、かため萬歳。

紫なす朝焼よ、萬歳。

我等は春の雷雨の如く、



我等は若き古武士の如し。

コーラス

天なる神は——夢想に過ぎず、

信仰無き世は——金モール。

ソシアリズムこそ——我等が信仰のぞみ

ソシアリズムこそ——我等が行手。

フリッツツ（馳けて行つて、扉を開ける。） ヤコブ、ウエンツエル、アルブレヒト！兄弟達、元氣だな。

（若い一團入り來り、若々しい聲々が騒々しい。）

ヤコブ 行くか？

フリッツツ 行く、君は？

ヤコブ 行く。アルブレヒトも行く。ム、は行けない、可愛相に。

ム、 うん、俺は肺病だからな。

ヤコブ 俺達は皆、少し酔つてゐんだ。で「赤帽子」に飲みに行かうと思つて君を呼びに來たのさ。

マックス（寢臺の傍の幕を開ける） おゝ、勇士達！ 御氣嫌よう！

一同 健康を祝します。タワリシチ、シユタルク。

マックス 軍隊式だね。どうしたんだい、愛國主義者の諸君？

ヤコブ 我々は社會主義者だ！ 併し、何よりも先づ生活し、アルビオンの轆に落入らない様にしなければなりません！

マックス この若者達は毒を盛られて居るんだ、この若者達は毒を盛られて居るんだ。

フリッツ お父さん、議論は止めて下さい！僕達が熱い心臓を持つて居ると云ふ事、僕達は善良なプロレタリアである事を信じて下さい。僕達には一滴のノルドランド式な傲慢さも有りません、僕達は——人間です！そして今はかう思へるんです。所謂、故國の爲めの仕事と我々階級の爲めの仕事は一つの同じものであると。

マックス さう思はれるだけだ！だが違ふ！諸君の仕事は——自國の政府と鬭争する事だ、隣國の労働者と和睦をする事なのだ！

アンナ お爺さんの言葉は總て何て綺麗で何て判つきりして居るんだらう！皆は追ひやられて行く様なものです！今の様な場合、こんな事を云ふのは残酷だと云ふ事は私も知つて居るわ、併しそれは……

エンマ　こんな時に、皆んなを怒らすんでないよ。

(ゼツヘルが馳けて来る。)

ゼツヘル　タワリシチ。僕は病院から来たんだ！彼處には仲間のラトール・シユルツが、両手、

兩足をもがれて寝て居る。手術の済んだ後で奴はもう口をきいて居るんだ。もう口をきいて居だ。諸君、何と云つてると思ふ？——××を呪つてやる、故國を呪つてやるんだ？つて云つてるんだ。傍には、彼奴のエンマが泣いて居たよ。(間)

マックス　××を呪つてやるんだ、故國を呪つてやるんだ。裏切者の、偽教師のフランク・フレイを呪つてやるんだ。聖い革命の爲めの戦ひならば、諸君を蹇にしやうと、諸君の生命を奪はうとかまはない、併しこんな戦ひのためにはどんな事があつても。

(彼の聲は鳴泣の爲めにとぎれ／＼になる、彼は激く咳込んで枕の上に俯伏す。陰惨な間。外部からアドレルマーチと行進する人々の足並みが騒がしく聞えて来る。やがてマーチは静かになつて行く、が室の中は依然として沈黙に閉されて居る。マックス。シユタルクの咳込むのと、エンマの啜泣きが聞える。

フリッツ　さうだ……俺は晴々して居る様に心に誓つたんだ。タワリシチ、「赤帽子」に行かう。

どうしたんだ、何で鼻をならして居るんだ。俺達は名譽ある労働者である事が大事なんだ！

臆病者、なまけ者でない事が大事なんだ。もつと事件に接近してから、どうとも決め様ぢあな

いか。さあ、仲よく一緒に行かう。

若き労働者の同盟よ、萬歳

……………

(歌ひ乍ら、若者達は出て行く。)

——(幕)——

### 第三場

宰相の邸宅内。食堂に續いて居る大きな客間。贅澤ではあるが、可成り不細工な家具。部屋の隅の机の上にある電氣スタンドが余り強く無い光で輝いてゐる。食堂に通ずる扉は開放されて居る。食堂は非常に明るい。笑聲、騒音、食器の響き。夜會服を纏つた婦人達や、フロツク、スモーキング、その他色々な軍服を着た人々の姿が見える。

從僕が給仕して居る。客間の電氣の置いてある机の傍にケツペンが腰を下ろして煙草を喫して居る。その向ひは一番年の若い伯爵レオポルド・フォン・ガトルプと宰相の秘書、ペトリツツが居る。

ケツペン　そりや、何でも無いさ。

ペートリツツ　ぢあ、どうするんで御座いませうかね？

ケツペン　神の法律おきてにかうある。汝、六日の間働きて、七日目にはその疲れを癒やせ。で實際の處僕は大體この割合に時間を別けて居る。素晴らしい勢で仕事をする。さてそれから自分の胸に聞いて見る。どうしたら僕の望み、僕の土曜日をより良く果す事が出来るだらうか？……………

…藝術かな？いや、そんなものは下らん。我々は皆、藝術が氣に入つた様な風をして居るだけなのだ。勿論、家を綺麗にしたりするのは良い、だがそれだけの事だ。食物？——つまらん。

酒？——身體に悪い。賭博、スポーツ？——退屈で労働も同様だ。——戀愛も似たりよつたり——それぢやあ——放蕩かな？——酒よりも、もつと身體に毒だ。上流社會の美人を追ひ廻すのも？——單調で、淡いものだし。結婚かな？……さうだ……喜びの爲めの結婚だ……従つて、僕の爲め、僕の喜びの爲めの妻だ……が、其處には個人的な趣味が顔を出して來る。僕の趣味はこうだ——感受性に富んでは居るが、貞淑な、肉シヤンな、しかも無汚な、天使の様なプロントの乙女だ。ファウストは正しかつたよ。私は魁惑的なグレートヘンを見付け出して、結婚した判けさ。

ガトルプ　幸福ですか？

タツペン　可成り永い間満足して居たよ。が、近頃こんな事を考へ出したね。絶對的に一夫一婦主義の結婚は八ヶ月から二十ヶ月位迄続けるのがいゝ處だ。がそれ以上はいかん。(間。どつと笑ひ崩れる聲が食堂から聞えて來る。)僕は自分の店の店員の中から素晴らしい女を選んだんだ。僕が生れてから今迄に見た美人の中の一人だよ。が、まあ僕の驚きを想像して見て呉れ給へ。極く最近、嬢あの姉さんで、何處かの煙草工場で働いて居る女に會つたんだがね、その女が嬢あよりも百倍も美しいんだ。何だか目が眩む様なんだよ。

ガトルプ いや、いゝ趣味ですな。女店員のお後が——女工か！ で、君はその女と結婚するの  
かね？姉さんと妹とを、取り換へつこして？

ケツペン この牝馬は大分馴し難さうだから、さう安々とは鞍を乗つける判けにも行くまいて。

大方、もう、あれは植字工か藥屋の丁稚かなんぞの密夫でも持つてるだらうよ。

ガトルプ ケツペン、君は何と云つても、平民出だよ。僕はそんな結婚をして身を墮さうとして

も、肉體的に出来ないね。偏見からでは無く——肉體的にね……………僕は空色の血統を

感じなけれや、氣が落ち付かない……………身だしなみ……………着物の着方……………あの佛蘭西語

の話しつ振り……………一寸でも野鄙な處があれば——魁惑は消えて仕舞ふよ。

ケツペン うん、君の素敵なお令閨の、伯爵夫人ミツチーは、貴族にや違ひ無いが、空色處か藍

色の血を湧かして居るおひきづり見たいなものだ！

ガトルプ 君には感覺が無いんだ。女はな、巴里式の身粧へをする事が出来るなら、着物の裾を

まくつて肩にかける事さへ許されてるんだよ……………

ペートリツツ でなけりや、着物をそつくり抜いで仕舞ふ事もでせうよ！

(三人笑ふ。)

ガトルプ ミツチイは實に素敵だ。あれの我儘は何處でも聞いて呉れる。あれこそ——首都の社  
交界に取つて必要缺く可からざる、唯一つしかない寶物だよ。

ペートリツツ レオ伯爵とラ、伯爵夫人だ。——喫煙室に行かうじあ有りませんか。

(伯爵レオとラ、ミが食堂から登場。彼が後の扉を閉めたので靜かになる。話して居た三人は横の扉  
から去る。)

レオ 僕は何も貴君を驚かせ度くは有りません。然し、僕はもう直き死ぬ事を知つて居るのです。  
そして、その事が大變私の氣に入つて居ます。あゝ、私が生活に疲れたのだと思はないで下さ  
い。さうぢあ無いんです。生活——ブラボー！素敵です！ブラボー！生活は美しく、面白く、  
強いものです…… 御覽の通り、私は未だ若いんです。(鏡を覗き込む。)生粹のノルドランド人  
です……藍色をした眼から、軍服のボタンに至る迄、鬚の先からサーベルの房に至る迄、皆  
何から何迄ちやんとして居ますよ、ハ、ハ、ハ……だが數日後には、突撃をして、眞進暗  
に馳け廻り乍ら、聲を限りにかう叫ぶんです、「戦の神よ！我が命を汝が御手に捧げん」と突然  
——ズドン！恐ろしい打撃を受けて戦死する……永遠の世界に旅立つ……が美しい屍は持  
ち運ばれ……やがては追善が爲されるだらう……そして如何に多くの女性の心の中で、こ  
の僕は現世の何人の心にも達し得ない輝きを身に浴びた年若き神として、生き永へる事であら



う。

ラ、 死………勿論、それは興味ある問題ですわ………私はどなたにも生きる事をお勧めは致しません。妾は十九です、が妾はもうこの未知のものを待つて居る事が出来なくなりました、總てが餘りにも平凡です。違つた大地、違つた大空が欲しいのです。妾も死ぬ事が出来たら、どんなに嬉しいでせう。妾はロベルトに斯う云つた事さへ有ります。「カイロに行く様な氣持で二人で死んだらどんなに嬉しいでせう」つてね。

レオ で、ロベルトは？

ラ、 あの人は妾を悲しみの淵に追ひやりました。あの世でも私達二人が一緒になるつて云ふ事がどうしてお前に判るんだい？世の中は地獄も同様だ。が此處なればこそお前は私のものなんだ。さう云つて彼の人は吃驚りした様に妾を見て居るのです。ロベルトも生活を愛しては居ません。誰一人生活を愛してるものは有りません。だけれどあの人は妾を愛して居るのです。

レオ ロベルトの愛は貴君の愛よりも強いんですか？

ラ、 いゝえ………彼の人は世界で一番尊いものです。あの人とあの人の詩より良いものは何も有りません。けれども、今貴君から是を受取つた時、妾は自分が貴君を強く愛して居るのに氣

が付きましました………（紙片れを読む）「二時間後に出發致す可く、最早や歸還する事無かる可しと存じ候。しかも君の微細き唇、奥深き眼に熱き接吻を捧げたる事は一度びも無是候。」二時間後？ それで………此處で妾に接吻なさり度いの？此の部屋は引切り無く人が入つて來ますわ。

レオ 聞えますか？あれ、あつちの部屋は静かです。誰かと演説をして居るのですよ。ハ、ハ、ハ、貴女に接吻させて下さい。貴女を接吻したと云ふ事を我的胸に傳へる爲め、私が死んで行く時貴女にそれを想ひ浮べて貰ふ爲めの接吻なのです。併し、出来る事なら、貴女を私のミインネジングル私の弟に對する不實な女にはしたく有りません。

（レオ、を抱いて接吻する。）

ラ、 おゝ！ 何と云ふ接吻………セヴィルの理髮師の接吻は屹度こんなだわ。

レオ 死の味が私の接吻をかくもふくよかなものにしたのです。

ラ、 馥かな、馥かな接吻、遠い／＼島々の様な。

レオ ほんとおお？もう一度？

（再び彼女を接吻する。扉が開いて、ロベルトが出て來る。）

ロベルト　　レオ、レイヒ伯爵が兄さんの事を話してゐるんです……　貴君が居ないと矢張り都合

が悪いですよ。(彼等を見て、素早く電氣の燭臺をつける。明るい光り。)　何をして居るんです？

(又直ぐに燈りを消す。)　どうしてそんな事をするんです、レオ？そんなさようならの仕方を……

(強めて笑ふ。)　貴君は肥つた牡牛の群を持つて居る癖に、その上可愛相な小羊迄望むんですか……

(くるつと向き直つて出て行く。)

ラ、　まあ、厭なこと……

レオ　　世の中に厭やな事なんかありません。貴女は死なないからこそさう思ふのです。戦争は——ペストだ！萬歳、戦ひの酣に酒宴をやつてゐるのだ！我々は——*Morturi*だ。こんな一寸とした事で氣を悪くする事はありません、こんな一寸とした事で。

ラ、　彼方に行きませう。

レオ　　行きますとも。

ラ、　レオ、ロベルトは兵隊に採られんでせうか？

レオ　　そんな事は有りません、ラ、。僕は、弟が採られない様にと望んで居ます。

ラ、　若しかしたら採られる様な事がありはしないでせうか？

（レオは何も答へずに、食堂の扉の方に行く。彼女は何か聞き度げな様子をしてながら、それもようしな  
いで彼の後に随ふ。客間は暫時室虚にたる。やがて横から宰相登場、扉に近づき、遠くから覗き込む。も  
う一度前に近づき、それから室の角に退く。顎鬚を掌に握り乍ら考へ込む。笑聲と話聲の聞えて来る光り  
輝いた扉を疑視める。入つて来た處から又出て行く。）

二人の従僕が出て来て、燈りをつけ、お茶の周意をし、ピアノの蓋を開ける。伯爵夫人ミツチー。ガト  
ルプ、音楽通のラデファイ及び太公の副官登場。）

ミツチー シャンパンの後には何か素晴らしい名曲が聞き度いもので御座いますわ。あのう、貴

君、トウラウ伯爵夫人は貴君と御同様、ハンガリアの方なのを御存知？

ラデファイ あの人にはワノリー公爵夫人の血統ですよ。有名な家柄です。

ミツチー 若しレオに即興がやれるとしたら、貴君だつて何か、天妙不可思議な、情熱的なもの  
も弾く事が出来るでせうよ。そうしたらあの方は蜂の針見度いに恥知らずな、ぶしつけな言葉  
を探り出すに違ひないわ。

ラデファイ 私は、あのスクリアビンが編曲したリストの浮き立つ様なバッカスの曲が大好きで御  
座います……………

ミツチー だけど可愛相なロベルト……………彼の人は天才には違ひ無いけれども飼兎だわ！ハ、ハ

ハ！……まあ本當にどうしたらいいんでせう。踊り度くて、踊り度くて堪ら無いわ！……  
妾達の倦き倦きした踊りでも無い、タンゴでも無い、唯もう死の眼の前で愛の爲めに狂喜の様  
になり度いの。死が虚な眼をして腰をおろして仕舞ひ、情熱の歡喜とはどんなものかと云ふ事  
を無言の中に知るにはどうしてもそれが必要です、貴方にそんなものを弾く事が出来るかし  
ら？

ラデファイ 出来ない事があるものですか。私には何でも出来ます。

副官 ハ、ハ！……ペルシヤの王様の手品使ひだなんて云つてたけれど、後でバケの皮がはけ  
てフロチスクの猶太人だと云ふ事が判つた奴が居ましたつけ。そいつは實際、獅子勳章と旭日  
章を持つて居ましたがね、大公殿下が、お前は回々教の坊主の様に二十四時間息をしないで居  
られるかとお聞きになつた時も、「私には何でも出来ます」つて云ひましたつけ。

ミツチー それで出来ました？

副官 いいえ。

ラデファイ ピアノでやれるものなら何でも神懸けて——お茶の子漬々です。

(客全部入つて来る。)

レオ さう思つてゐるんなら、それで結構さ。シヤンパンをもう少し呉れ給へ。私達は盃を手にし  
て聞かうぢありませんか。

ガトルプ が此れが實際、即興だと云ふ事を信じてかまは無いのでせうかね？

ペートリツツ さう、私達はかうしませう。ラデファイが弾いてから、そのリズムに合わせてロベル

ト伯爵が詩をつくる、と云ふことに……

ガトルプ 何か決つたテーマでですか？

ラ、 貴君は違つた音楽と違つたテーマを詩人に結びつけ様となさるんですね。妾はロベルトが

そんな風にして詩をつくるのを好みません。

ミツチー まるで手品の御褒賞に獅子勳章を貰つたヴオロチスクの手品師の様ですわ。

レオ シツ！ 楽しむのは好いですが、眞面目にやらうぢありませんか。我々は詩人に完全な

自由と撰擇を興へませう。ロベルト、今日起つた一番大きな事柄を即興詩にしないかね？

ロベルト よろしい……やりませう……

聲々 ブラボー！

ラデファイ だが、私はそれがどんなものだが、あらかじめ知らなけりやなりません。陽氣な奴で

すか？悲しみですか？情熱ですか？

ロベルト 有らゆるものです……これはどんな音楽にも合はせられます。

聲々 ブラボー！

レオ シツ！弾いて呉れ給へ、ラデファイ。

(ラデファイ弾く。ロベルトは彼の傍に立つ。ひそ／＼と話し會ふ聲、くすくす笑ひ。)

ミツチー 月並みの音楽ぢはありませんわ。火の様です……

ガトルプ が要するに此奴はシヤンパンぢやないな、トーカイ葡萄酒だ。甘口だね。

ペートリツツ さうかと思ふと酸っぱい處もありますよ。いや、甘露々々。

レオ シツ……

ロベルト

今日の日、今日の日。

過ぎ去り行くものよ……

盃は愁を含みぬ……

死は——狡猾なる女囚人か、

爪と尻尾を隠すエロートか。

半ば面蔽れるが如き顔の白さよ……

そは、雪か、はた薄絹か

驚き入りし兩頬こそは

更に、更に蒼白かりき。

電氣の燈りはレントゲンのごと

數々の骨寫し出せども、

悲しきは、心臓の影さへ見えす、

我は敗れぬ、我こそは虜れ人、

我は我が身をば狭めん

我こそ哀れなる一介の詩人よ。

テーマとテンポを換えて下さい、ラデファイ、あゝ、そんなのでもかまひません。(間)

我は知る、汝の死に趣くを、

されど我等又共に行かん。



總ては死の眞近に住居し、

深淵は愚かしき顔して我等を笑ふ。

汝もし幻しとせば、我は影人。

幻の國への絲を見出せし我、

燈火點りたる刹那、切れ果てぬ……………

アリタドナの絲は切れ果てぬ……………

生き永らへよ……………

汝は幻なり。然り、年若き戰士よ！

汝は亡びて幻とならん。

汝は安らげく、我亦安らげし。

汝は逝き人なり、我亦逝き人なり……………

もう澤山です、ラデファイ、今日は氣が向かない。

聲々　　ブラボー！

ミツチー　　ほんやりとしたものでは御座いますが、鋭くて、獨特ですわね。勿論、妾達はこうし

たシムボルの世界は卒業して仕舞ひましたけれど。ラデファイ、何か小悪魔的なワルツを弾つて下さいな。

ガトルプ　ロベルト・デルンバツハが才能ある詩人だと云ふ事は、いや全く、疑ふ餘地は有りませんが、併し淋しい方ですな。

レオ（小声でナムに）。　ラ、……………泣いて居るんですか？　よろしい。眼に涙を溜めた儘で弟の處

に行らつしやい。その涙は貴君のダイヤモンドの耳飾りよりも高價なものです。

ケツペン　確かな處ミツチー伯爵夫人も即興をやりたがつてる様ですな。

副官　あの可愛らしい足で……………あの見事な肉體で。

客達　一つお願いします、ガトルプ夫人……………踊つて下さいませんか。ミツチー、ミツチー！何

か新しい、奇抜な奴を。あの方は素晴らしい踊りをやりますよ。偉いもんです。

ミツチー　承知しました。

ラデファイ　ちあ、悪魔のワルツを一つ。

ミツチー　レオ、ロベルト、此處にお坐けなさい。貴君方の爲めに踊つて上げますから。

（ラデファイ、弾く。ミツチー、情熱的な、可成り放恣な踊りを踊る。）

聲々　　ブラボー！

ミツチー　　ブラボー？そんなら乾盃して頂戴。

ミツチーの爲めにシヤンパンだ！

聲々

彼女の踊りはどんなシヤンパンよりも酔ひがよく効きますよ。

だが酒との違ひは、あの踊りが熱情を引き起す事ですな。

シヤンパン！シヤンパン！

ラ、(ペートリツツに近よつて)　　ペートリツツ！本當にロベルトは大丈夫なの？

(ペートリツツつと彼女を見つめる。)

ラ、　　何故そんなに見て居るの、ペートリツツ？貴君は妾を苦しめるんですか？ペートリツツ、

ペートリツツ、貴君はまるで、首斬役人が殺されるものに對する時の様な眼付きて妾を見て居るのね。

ペートリツツ(心から喜び乍ら)　　伯爵ロベルト・フォン・トゥラウはお父様が固執なさつたので、

遂々兵隊にとられる事になりましたよ。(ラ、近くの椅子を捉む。)

レオ(ミツチーを抱きかゝへて)　　何て素晴らしいんだ！(彼女に接吻する。貴女とガトルプとの御許しも

受けないうで失禮しました。それから貴女は戦地へいらして、踊りを踊らなければなりませんよ。

ミツチー　大砲の轟を耳にし乍ら！必ず行きますわ。

ラ、(ロベルトの坐つて居る椅子に凭り掛つてその上にかゝむ。)　妾は今直ぐに貴君に話さなければならぬ事があるの、今直ぐに！

ロベルト(立上り乍ら)　僕には必要ない。いや、そんな事は許しません(彼女から遠のく)ケツペン・貴君はどうして奥さんを連れて来ないんですか？美人ださうぢありませんか？

ケツペン　妻は臆病でしてね。

ガトルプ　ケツペンは回々教の王様の様にやきもち焼なんだよ。

ミツチー　妾の本當の生命は——踊りだわ。

レオ　まさか。で外には何も本當の生命は無いんですか？

ミツチー　全くの話、妾今迄に、踊りが成功した時ほど甘やかな熱情を感じた事は一度も御座いませんわ。

レオ　え、それは判ります。何と云ひませうか、貴女が踊つていらつしやるのを見てぐんぐ

引きつけられない者はありませんよ。

士官 酒の神、バッカスの喜びに！

他の士官 云ふに云はれぬ境地に引かれて行く様ですな。

レオ 貴君がある決つたヂエスチアをやられると——いや實に神品ですな。

ミツチー 妾、知つてますわ。ほら、こうでせう。(あるポオズを取る。周囲のものは皆湯彩をする。)

(宰相が入つて来る。皆、顎然とする。彼は、眞直ぐに、堂々と、氣嫌悪る氣に歩む。)

宰相 皆さん……失禮さして頂きます。仕事の前に楽しまうと云ふ若い方々の考へはよく判り

ます。併し現在、今、宰相の家の中で、音楽が響き、燈火が輝いて居る必要はありますまい。

皆さん、敵の主力の襲撃を受けて居た第七聯隊は、三萬を數ふる我が兵士の死骸を残して退却

しました。(間。)レオとロベルト、お母さんの處においでなさい。お母さんは身體が大變悪い様

だから。——失禮いたします、皆さん、

——幕——

## 第四場

六ヶ月後。騎兵師團長、伯爵レオ・デルンバツハ・フォン・トウラウの天幕。戦時行軍用のもの。戦線は目と鼻の先にある。レオが机の傍らの椅子に腰を下ろして、何か書いてゐる。外に二人の士官が、他の机に向つて働いてゐる。傳令が戸口に立つて居る。

レオ (ペンを投げ出し乍ら) あーあ……神様は一體何て云ふ仕事を俺に云ひ付けたんだら

う。退屈な戦争だなあ、プフエツフェル。一番巾をきかしてゐるのが食料品の罐詰で、その上、敵の姿を見もしないでお互に殺し合つてるなんて、自棄に數理的な戦争だよ。(伸びをする。) タンデル、今日はいゝ處を一杯グツとやつつけようぜ、この悪魔の巢の中には何一つ楽しみになるものなんかありあしない、何もかも飽きくしちやつた。畜生！ 平和か死か、どつちにしる早く片が付いてくれ。運命の奴、俺を嘲笑ひ初めて居やがる。

(電話の鈴。若い士官が電話口に行く。)

若い士官 さうです……騎兵第四師團の天幕です……うん……さうですか……今直ぐ

報告します。(受話器にかける)。閣下、敵軍の飛行機が前哨線を越えて、進路を此方に向けて

居ります。若し、第四百四拾貳砲兵中隊でこれを喰ひ止め無い時は、一時間餘の中にやつて来る事と思ひます。

レオ（軽くあくびをし乍ら） 馬鹿々々しい、こんな遠くに來る迄棄つて置きはせんよ。

年上の士官 併し、先週の木曜にはどうで御座いました。

レオ あの時以來、防禦策がほどこされて居るんだ。

（聯隊長、フォン・オクレイツが本部からやつて來る）

オクレイツ 閣下！………敵軍と和睦を策つて居た重大犯人が歩兵憲兵隊の手で逮捕されました。閣下の最も嚴重な處分が絶対に必要であります。犯人は閣下直接に御訊問して戴くやうに連れて來てあります。

レオ うん、そうか。そいつは結構。これで三十分ばかり潰れるわい。汝、戦ひに出づれば、永遠に忙しく、永遠に淋しからん。少しでも面白い問題だつたら、話しなりとして見やうぢあないか。連れて來給へ。

（フリッツ・シユタルク、護送されて入つて來る。）

レオ（暫くの間、互に眺め合ふ） 名前は？

フリッツ　フリッツ・シユタルク、第六拾六射撃隊の下士官です。

レオ　主義××者か？

フリッツ　さうです。

レオ　家に歸り度いのか？恐いのか？それとも氣が違つたのか？

フリッツ　目が覺めたんです。

レオ　うん。やぶにらみの眼がさめたんだらう。眞直ぐに歩かせるにはお付きが三十人も要るだ

らうよ、同志先生。(間)まんざら學問がなささうでもないが、何の爲めに國を賣る様な事をす

るんだ？　馬鹿な奴だ！

フリッツ　もう澤山だ。悪口迄云つて侮辱する積りか。その報るは屹度やつて來るだらう。銃

殺してくれ。そんな馬鹿らしい事は聞いて居られん。

レオ　黙れ！

フリッツ　君はトウラウ伯爵だらう。君の兄弟には詩人が居る。君のお父さんは判らず屋ではあ

るが非常に氣高い人だ、それなのに、君は學問の無い、亂暴な將校同然、冷淡にも、この名譽

ある俺を戦はずして殺さうと云ふのか。



オクレイツ 閣下……御覽の通り、問題ははつきりしました。そいつを朝迄、監視所に入りて置き、それから一寸した手續を済ませて……

レオ オクレイツ大佐、必要な時は僕が命令する。彼奴の持物を搜索したかね？

オクレイツ はい、閣下……これが何か書き記した手帳です。これが彼奴に宛てた手紙、色

女が何かから来たものの様であります。

レオ 此方に呉れ給へ。(手帳の頁を繰る)ふん哲學者だな。「最も幸福なるものにつつても個人の額縁の中で生活する事は許されない。」「最大の幸福は兎角く些細な事にある。來る可き世界を創り出す溶鑛爐の中に身を投ずる事に依て満足を感じ得られれば充分である。——こりあ満更惡くも無い……お前は大學生か？

フリッツ 錠前工だ。

レオ ほう、詩かね……オクレイツ、タンデル、プフェツフェル、まあ此方に來て、此奴の書いた詩を聞き給へ。

俺はお前を信じて居た。

かくて、劔を手に俺達の旗の下に施せ参じたのだ。

だが何といふ間違ひだ。！シーサーとブルータスの間には聯盟は有り得ないのだ。

お前の首斬役人——

俺の空想！おゝ、民衆の首斬役人、自分の奴隷を首斬る鬼なのだ、暴君なのだ！

うむ……オクレイツ、實に炎の様な言葉の飾り方だ！

フリツツ　　え……それは少し言葉を飾り過ぎましたよ、だがこいつは榴散弾の下でつくつも

たんです。神経が張り切つて居る時です。

我慢しろ、××よ、靜かに地の底を掘れ！

そして、それがやがては爆破するのだといふ事を知つて満足して呉れ！

労働者の世界は汚穢はしい墓穴の中に押し込められて仕舞つた。

苦惱と憤激と恐怖の法會の中に……だが、彼は立上つて来る！……

そして彼とは——君自身の事なのだ。

××よ、死んで行け、だが復讐の日を一日でも近づける！

オクレイツ 閣下、もう切りを付けて良い頃だと思いますが。

レオ うん………で、お前はこんなものを作つて、あちこちにバラ撒いてる歩くんだな。結

構な仕事だ。あゝ………此處には抒情詩が書いてある。實に頭のいゝ奴だ。これはお前が書いたのか？(若い士官、近寄つて眺る。) 見給へ、プフエツフェル、實に素晴らしい頭だ。この男の筆つきには才能がひらめいて居る。その上詩が沿えてある。

何故かは知らねど、此の世の中の物珍らしく、

我等は奇蹟の門口に立てり。

眞白き雪の林に、

夢通ふ我が枕邊に、

幻のアンナよ、何かは待つ、

うむ………見給へ、彼はこの眼と一寸横にかしげたこの顔の中に期待して居る事を現したのだ。

この松の木の書き様はどうだ！うん。立派な若者だわい。(立上つて、室の中を歩き廻る。)うん……

……お前は鐵砲を擔ぐ必要は無い！……オクレイツ大佐、彼を速刻、戦地から送還する

手続きを取つて呉れ給へ。豫備中隊に送つて砲鐵、の代りに畫筆を握らせるんだ！

オクレイツ　併し、閣下……………

レオ　もう澤山だ！（電話がかゝつて来る。）連れて行き給へ。書類と……………戦地には不適當である。と云ふ理由をつけて送還するんだ。行き給へ。

若い士官　（電話口で）はい、はい……………報告します……………閣下、敵の飛行機は第四百四拾貳砲兵中隊を突破しました。大した事ではありませんか、準備が必要です。燈を消さなければなりません。高射砲を準備しなければなりません。

レオ　うん、勿論だ、御苦勞だが、出掛けて行つて、防禦して呉れ給へ！（彼を送り出す）。全く何と下らん事だ。俺がノルドランドの彈丸であの様な青年を殺さうとでも云ふのか。いや、全く結構な事だ！

オクレイツ　失禮ですが、閣下。私は徹底的に反對です。戦争と云ふお芝居にはセンチメンタルズムは向きません。

レオ（大聲で）　だが大佐、反抗も又、許されては居らん。君は僕の前で自分の意見を述べる権利は無い。

(傳令登場)

傳命 輕騎兵が一名到着して、この書面を閣下に渡して呉れとの事であります。遠慮無く申せば、實に奇妙な若者であります、閣下。

レオ (讀む)

何だと、「私は死と喜びの踊を踊りたるものに候。後で御後悔なさるゝ事無是様秘密に、そつと御通し下され度候」。何てロマンチックな奴だ。多分、氣違ひだらう。ぢあ、一寸の間その男と僕と二人限りにして置いて呉れ。今日はやけにロマンチックな暁だ。

(外套を身に纏つた、すらつとした輕騎兵が入つて来る。敬禮をし、拍車を鳴らす。皆出て行く)

輕騎兵 (外套を抜き棄て、) 氣が付かなかつたこと?

レオ 女だ。あゝ、やあ……ミツチーだ。ブラボー、ブラボー!

輕騎兵 女の身装では此處に通して呉れないの。

レオ いや、さうして居ると尙更チャーミングだ。こら、兵卒!

(傳令登場)

レオ 今日、シヤンパンを用意する様に云つたぢあないか、まだ夕飯の時間ぢや無いのか?

兵卒 一寸御待ち願ひます。閣下。(出て行く。)

レオ　ねえ、ミツチー、接吻しやう。あゝ、何て可愛い兒なのだらう！ペテン屋さん、こんな顔をして。でも、外套を着て居るので女だつて事が判らないんだね。いや、一寸も判りやしない。

ミツチー　だけど、見方によつちや、乗馬ズボンをはいた姿を人に見せるのは一寸も恥かしくはないわ。ドクトル・エムゼは妾のこうした格構を見て、妾の身體の線がとても素晴らしい瀬戸物の様だつて云つたわよ！

（從卒がそゝくさと机の上に布を被せ、皿や瓶をその上にのせる。）

レオ　輕騎兵殿、どうぞ。（二人坐る）君、出て行つて呉れんか。俺はこの年若い勇士と秘密の話しがあるのだ。

（從卒退場）

レオ　うん、貴女の冒険には弱つたな！此處は今日、まかり間違へば危険なんですよ。敵の飛行機が近づいて居るんです。

ミツチー　此處へ？

レオ　うん。

ミツチー 何故、妾を叱驚りさせるの。(咳をする)。お酒が喉に塞りさうだわ、噓付き。

レオ 噓だ、噓だ。……………

ミツチー 妾を驚かしちや厭や。だけどペトリッツが此處は一寸も危険ぢあ無いつて云ひました

わ。

レオ 貴女の兩方の目を射抜いて、瀕死の重傷を負はすだけです。御亭はどうしてますかね？

ミツチー 御亭主の事なんかきくもんぢやないわ。妾のコツクの事を聞いた方が未だ増しだわ。

レオ 彼等の健康の爲めに！(飲む。)

ミツチー 誰の健康？

レオ ガトルプ伯爵と貴女の料理番のですよ。こいつは全く何もかも面白い。——それからね——又、色んな事が元通りよくなつて來ますよ。

ミツチー お、早く平和が來る様に！妾、貴君の事で目が廻りさうよ！

レオ 併し、僕は死ぬんだ、その爲にこそ戦争に來たんですからね。

ミツチー！ 今話して居た飛行機の爆弾なんかで？

レオ　　どう致しまして。この事は僕も確心して居ますよ。僕は奇麗な死に方をするんだ。英雄的なね。イリヤードの英雄が死んだ様に。僕は知つてゐますよ。僕が直ぐ死ぬといふ事、立派な死に方をするると云ふ事は僕の唯一の神秘なんです。僕は今迄生き永らへた事さへ不思議だ。これは、僕達二人が一緒に明かす夜の爲めに運命が僕の生命を保つて居て呉れたのです。盃はもう唇につけられて居ます。たとへ運命でもこの盃を取り去る事は出来ません。

(遠くで爆音。若い士官が足早やに入り来る。)

若い士官　　敵の飛行機が陣營の上を飛んで居ます。残念乍ら閣下、我が軍は危険でないとは申されませんが、動搖の様子が見えます。

レオ(盃を机の上に置いて)　　畜生！ミツチー、十分ばかり行つて來ますよ。僕とガルロウイユ

ースとでその飛行機を一分間の中に墜落させてやるから。(雙眼鏡を手にして出て行く。)

ミツチー(一人で)　　妾恐わいわ。誰も居ない。(爆音、非常に近い。)あゝ！神様！(大砲の響き、續い

てもう一つ。やがて又、非常に強い爆音。)　　神様、イエス様、マリア様……………神様……………妾だけは、

妾だけは！……………　　おゝ、神様！あゝ！本當に恐しい事。(再び大砲を發射する音。)　　お守護り下

さいませ、お守護り下さいませ、恐ろしい！



オクレイツ（つかくと室内に入つて来る）  
とんだ災難です、フォン・トゥラウ將軍は戦死されま  
した。

（更に二三の士官が、がっかりした様子をして入つて来る。）

オクレイツ　どうしたんだ、此方に運び給へ。

若い士官　大佐殿、運び込めと仰言るのですか？將軍は紛々になられました。

（ミツチー叫び聲を擧げて卒倒する。）

オクレイツ　まるで女見たいな士官だ！

若い士官　こりや、若い御婦人です、大佐殿！

オクレイツ　トゥラウも可愛い相に！未だ生きて居たかつたんだよ……

若い士官　ガリシヤの飛行機だつて恐らくさうでせう。私達はうまく射撃したんで、一寸とした

碎片の外は乗り手も機體も紛々です。

年上の士官　生命あつての物種ねだ。御婦人の心配でもするかな。（ミツチーの顔に水をかける。）

入つて来た士官　何と云ふ損失だ。諸君はトゥラウ將軍の顔を見ましたか？何とも云へぬ物凄

さだ。いや、將軍は勇敢な方でしたな。

オクレイツ　　顔は残つて居るのかね？

入つて来た士官　　はい。兵卒等が首を見付けました。物凄いい首です。まるで、死ぬ最後の瞬間

に、爆弾や死より、もつと苦しいものを眺めてもしたかの様です！

（大鼓の響き。招集喇叭。）

ミツチー（我に歸つて）　　妾は何處に居るんだらう？　あの人は何處に居るんだらう？　おゝ、家

へ歸り度い、家へ！

（士官達は彼女を振り返つて見て、肩をすぼめて、出て行く。）

（ミツチー一人だけ取残される、太鼓の音。喇叭手の合圖。ミツチー、子供の様に激しく泣く。）

——（幕）——

## 第五場

宰相の書齋。机の上に大きな十字架。部屋の造りがピュールリタンの嚴格さを現して居る。宰相とペトリツツ。電燈が輝いて居る。

宰相

うん…………… こんなに判つきりと勝味が我々の方に移つて來たからにはたとへどんな事が

あつても、これを味方に都合のよい様に利用し、奴等の平和を破壊しなければならぬ。我々は最初の攻撃の時から彼等を潰滅させる事をようしなかつたし、又なし得なかつた。そしてその時からもう、奴等が我々を飢餓に曝すだらうと云ふ事は火を見るより明かだつた。おゝこの飢餓、ペトリツツ。食物の切れ片が喉の中でごろ／＼して居る。ベレンベルグの家の晝餐に、幾皿も／＼御馳走が出てきた時、俺は立ち上らう、出て行かうと云ふ氣持を抑へるのに何とも云へない努力をした。

ペトリツツ

併し殿下は非常に御愉快さうで御座いました。(間) 目指す敵は——××××××です。

奴等はものを啄む蛆のやうなもので……………

宰相

ペトリツツ、俺はあの狂信者達は嫌ひだ。俺は、奴等がどんなに醜い尻尾を持つて居る

かを知つて居る。どんなに多くのペテン師や通りすがりのものが、自分のポートをこの一味徒黨の汽船に横着けにした事だらう。だが、ペトリツツ、昨日の晝餐の時に……おゝ！あの晝餐の時、殿下がこの俺を隣んで下さる事が出来たら、せめて俺の苦しみを御想ひ出しになつて下さつたら……

ペトリツツ 併し、アトランチーダの使者はどうで御座いました？

宰相 うん……あの晝食の時に……うん……たらふく飲み喰ひして居る奴等の顔を見た時……奴等の悪戯や騒ぎ聲を聞いた時……おゝ、神様！奴等は何も考えなかつた、奴等は塹壕のことも、避病院のことも、墓のことも忘れてしまつて居た……飢えに迫られた子供の身を案じて泣いて居る母親達の事も忘れて仕舞つて居た……

ペトリツツ 伯爵は餘りに心配なさり過ぎます。あゝ、殿下は——キリスト教徒です。閣下のような方は外にまたとございません。

宰相 俺が心配をし過ぎる？ 俺は唇を血だらけにするのを知り乍らも戦争を開始したのだ、それは、信仰を持つて居るからだ。おゝ、俺は正しいものをも、罪あるものをも殺害する事を命じる迷信家の様な言葉を口にして仕舞つた。だが主は正しいものを選んで下さる。さうだ。

ブハガワート・ギーテの云ふ通りだ。偉大な事が成就されやうとして居るのだ。生命を失つて仕舞つた身體に惜憫を感じてはならない、天に在す我等の神がその魂を引取つて下さるのだ。

ペトリツツ 又とない、又とない御心です。現存の懐疑的な時代に色々な大學や天文臺や實驗室とならんで、此の様な童子の様な御心を御待ち遊ばすとは。

宰相 ペトリツツ。君はするい人間だ。君は悪魔の廻し者だ。君は人間を苦しめ嘲り笑ふ事が好きなのだ。

ペトリツツ（驚いて） どうなさつたのです、伯爵！本當に吃驚りするぢあ御座いませんか……貴君のペトリツツに向つてそんな事を仰言るのですか？ 貴君の従僕、信ず可きペトリツツに向つて？ 自分のもつてもにぶい魂の中に信仰を持ち合せなかつたからと云つて毀れ易い食器の様な、この哀れなペトリツツ奴が、悪いので御座いませうか？ 伯爵様、皆が皆迄深刻で偉大である判けあひのものでは御座いませぬ。おゝ、全く私は吃驚りしましたよ。

宰相 童子の様な心を持つ？……うん、俺は悲しみと喜びを通して偉大な事をも、衰退をも持ち來らすのだ。若し俺を墮落さす事が神様に必要ならば——

ペトリツツ 伯爵は尊大で居られます。勿論、キリスト教的尊大さです。若し秘密が秘密を開

き、總ての人々が、世界の底には何人も何物も無いと思ふ様になつたとしても、貴君は傲然として繰返されるでせう、俺は全世界の神々を見る事が出来る、と！

宰相

さうかも知れ無い、ペトリツツ、さうかも知れない……ちやんと目錄見の立つた勝利の爲めならたとへ幾百、幾千、幾百萬の犠牲があつても、俺は威風堂々と爲し遂げた。だが、この道化芝居ばかりは！

ペトリツツ

殿下は賢明で恵み深くあらせられますが、唯輕卒であらせられます。

宰相

殿下……太公殿下……××……此等の言葉を「神……人類の救世主、來る可き

審判の裁き手」等と云ふ言葉と同じ様に尊敬の情を以て口にしたものだ……世の中で一番恐ろしい事は××を汚す××、祭壇を汚す僧正の存在を許す事だ。

ペトリツツ

大公は遊びや物珍らしい企み事に夢中になつて居られます。

宰相

外にどうする事も出来るものか、彼の方は——子供だ。

ペトリツツ

その通り。勿論で御座います……殿下はやつと三十にお成りになつた許りで御

座います。あの有名なガトルブ伯爵夫人ミツチーは若様の悲しむ可き戦死の後、まるで病人の様な體で歸つて來ましたが、大公は彼の方を慰め様となさつて居られます。御二方はゲルツエ

ン・フリーデに赴むかれて、其處で何かひどい事が在つたさうで御座いますが——信じ難い事で御座います。……………それにこんな事迄申して居ります……………

宰相 ペトリッツ……………秘密警察からどんな報告があつた。君は仲々變つた事を聞き込んで來るね。

ペトリッツ 殿下とミツチーはお互に慰め合つて居られます。大公妃殿の御健康は勝れず、その上この様な危急の眞最中に。

宰相 うむ……………戦死者の寡婦達に扶助料を與へる命令を出すのを忘れない様にして呉れ給へ。

ペトリッツ 人々の噂に依りますと陛下の御教授役ラスウィッツ老博士はゲルツエンフリーデのドンチヤン騒ぎの晩の評判が傳つて居ると云ふ事を押して陛下に御告げしたさうで御座います……………

宰相 止め給へ、ペトリッツ……………

ペトリッツ 私は唯、殿下が老博士に「それは悲しみの餘りだ。余とガトルプ伯爵夫人とは共に悲しみを荷つて戦争を過ぎして居るのだ」と答へられたと云ふ事を御話したかつたので御座います。あの、ガトルプ伯爵夫人一人を取り圍んだ騎士隊の宴會、ベレンツルグ家の晝餐の後

宰相 ペトリツツ！

ペトリツツ これは失禮致しました……………末亡人の扶助料で御座いましたな……………かしこまりました。

宰相 そんな穢はしい事はどんな事があつても俺には言はないで呉れ給へ。

ペトリツツ 此れは警察からの報告なのでして……………はい、よく調べて見ませう。伯爵、奥様がお越しの様で御座います。私は御遠慮申しませう。

(色々な書類を紙狭みの中に入れて退場。と同時に宰相夫人が喪服を身に纏つて登場。宰相の傍に腰を下す。窓の外では風が強く吹いて居る。誰か、病人が激しく泣いて居るかの様である。)

伯爵夫人 カール……………

宰相 どうしたね？……………又興奮して居る様ぢやないか、ひどく身體の様子が悪さうだよ。

伯爵夫人 カール……………お願いだからシエーデルを呼んで下さいな。

宰相 だが、あいつはかたりだ。

伯爵夫人 シエーデルを呼んで下さい…………… 妾はレオと話しをしなければならぬのです。話をしなければならぬのです。



宰相　巫子なんぞにかまはずに、神と教會を信じなければいけない。

伯爵夫人　だけれどレオが何か云つて居るのです。聽えるでせう、魂のむせび泣いて居るのが？  
聽えるでせう？　妾は亦レオを見ましたわ……これで二度目です。ひどく悩ましさうな様子をして居ました……まるで何か想ひ出してでも居るかの様でした……魂がむせび泣いて居るのが聽えませんか？　妾はあの子に尋ねました。「レオや、——妾はかう云つたのです——レオや、お前は今では彼の世に逝つて仕舞つたが、ロベルトは生き永へるかどうか、妾に、お母様に話してお呉れ？　永生りするかえ、妾の生命の續いてゐる限り」けれどあの子は何にも云はずに……黙つて居るんですの……と突然、何か大聲で怒鳴り度くてたまらない様な格構をしましたわ……丁度こんな風な……そして物悲しさうに微笑つてゐるんです……（兩眼を拭く。）　魂がすゝり泣いて居るのが聽えるでせう？

宰相　病氣が悪い様だ……安心なさい、俺はロベルトをマフトシユタツトの「兵士の譽り」の編輯局に轉任せしめる様ルユトツフに頼んで置いた……安心なさい……あの子はもう直きお前と一緒に暮らす様になる。安心して養生なさい。

伯爵夫人　まあ？　貴君はロベルトを轉任させて下さつたの？　本當に善い事だわ、本當に善い事だ

わ遂々！それが貴君には困難な事だつたのは妾にも判りますわ……………カール、妾達は何て隔りがあるのでせう！妾は貴君の氣持が判ります、けれどほんの僅かですわ。で妾達は年から年中、隔つて居たのです。妾達には三人の子供がありました……………二人は彼の世に逝つて仕舞ひ、一人残つて居る切りです。それなのに妾達には隔りがあるのです……………カール、風が吹いて居るのかしら？今日は吹雪だ……………明るくしなければいけない……………いや、そんな必要は無いわ……………どつち道、同じ事ですわ。多分、レオは此處に来て居るのです、餘り明る過ぎると嫌がるかも知れない。(間)カール、貴君は妾を大變不幸なものにして仕舞ひなさいました。貴君は妾の生活を變へてお仕舞ひになりました。そして貴君は(涙を拭く)……………妾からレオを奪つて仕舞つたのです……………だけれど、カール、カール、忘れないで下さい——若しロベルド迄奪つてお仕舞ひになるなら——妾は貴君をお許しする事は出来ません。その時は貴君を呪ふでせういゝえ、貴君はロベルトを奪ふ事はお出来になりません……………(遠くからピアノの響き)聽えて？あれはラ、です。トリタスンの最後の場を弾いてゐます……………聽えて？あの子の頭は一つの考へて一杯です。おゝ、貴君が若しロベルトを奪つてお仕舞ひになつたら。妾達はどんなに貴君を憎む事ですわ。

宰相

彼は歸つて来る……………彼は四日も経てば戻つて来て、もう他所へ行きはしないよ。

(ピアノ、突然止む。)

伯爵夫人　　どうして弾くのを止めたのだらう？あんなに急に？泣いて居るんですわ屹度……泣いて居るんですわ……慰めに行つてやらなけりや……ロベルトが四日後には戻つて來ると云ふ事を話してやらなくちあ……四日経てば、貴君はさう仰言いましたね。

(宰相うなづく。夫人退場。)

宰相(獨りで)　　神様、私が出来得る限りのものを破滅から救はうとして居るのを御存じで御座いませう。堅固なる神よ、我を支へ給へ。知られざる罪過を罰し給へ……最後迄信じ続け得る様御力を垂れ給へ。

(若い秘書登場。)

宰相　　何だ？

若い秘書　　労働大臣からの緊急書類でございます。

宰相　　此方に呉れ給へ……(眼を通す。)何もかも名聲の爲めばかりだ……だが伶俐なやり口だ……署名すると云つて呉れ給へ……だが明日だ、よく氣を付けて讀まなければならん。

若い秘書　　労働大臣の御言葉では、頗る急を要する事ださうで御座います。

宰相 労働大臣、フレイ先生は誰にも物を考へる豫猶を興へない。俺は明日、署名する。

(書類を読む。秘書禮をして出て行く。ペトリッツ登場。歩き方に何だか變な様子がある。鋭い、何が隠して居る様な顔付きをして居る。)

ペトリッツ(宰相の傍に立つて、長い間沈黙して居た後話し出す) 閣下……………閣下……………どうぞ神様

と十字架を御疑視めになつて、勇氣をお出し下さい。

宰相 高い聲で呼ぶ) え!何だ……………何が又起つたと云ふんだ、ペトリッツ!

ペトリッツ 列車の轉覆でございませう。軍用列車八百四十二號がデイルタウ附近で貨物列車と衝

突したので御座います。

宰相 うん……………何と云ふことだ。……………犠牲者は多いか?

ペトリッツ 即死八名、負傷者三十名、内數名は重傷で御座います。

宰相 あ、ペトリッツ、ペトリッツ、誰が君の云ふ事を本氣に出来やう?君のその悲しむ可き報

知は、俺の心臓の鼓動が未だ止まない位、俺を吃驚りさせた。(額を拭く。髪が汗びつしよ  
りだ。勿論、これは非常な災難だ。即死八名、負傷者三十名……………だが不幸な事に我々の悲し  
む可き損失にこの位の人數は餘り珍らしい事では無くなつて仕舞つた。